

資料紹介

第一次世界大戦と在独日本人の抑留問題（四）

梶原克彦
奈良岡聰智

目次

総論・解説

- 一 池邊榮太郎（以上、第四十七号）
- 二 石川源三郎・野依辰治・前園秀松他（以上、第四十八号）
- 三 内島昌雄・西成甫・三間隆次（以上、第四十九号）
- 四 大瀧潤家・鴻海蔵・岡田日人・杉田直樹（以上、本号）

解説

本号では、南ドイツの雄邦バイエルン王国とその首府ミュンヘンにおける日本人の抑留と退去の問題を取り上げる。カトリック圏であるバイエルン王国には、「北のドイツ」、殊にプロイセンとは異なる気風が存在し、住民もそれを矜持するところがあった。首府ミュンヘンは芸術と学術とをもって顕揚されており、実業之日本社・社長の増田義一は、第一次世界大戦勃発直前にミュンヘンを訪れた際、「ミュンヘンは古

き都会にて京都の趣き有」との感想を残している^①。

増田の滞在には政治学者の大山郁夫（早稲田大学）も同行していたが、大山は当時ミュンヘン大学に留学していた。ミュンヘン大学は一四七二年創設のドイツ語圏屈指の名門校であり、大山のように、明治・大正期に日本からの多くの学究が同大学の門を叩いていた。人文・社会科学についてみると、大戦直前では、石倉小三郎（第七高等学校教授、ドイツ文学者・音楽評論家）、小林澄兄（慶應義塾大学教授、教育学者）、櫻井天壇^②（第八高等学校教授、ドイツ文学者）、澤木四方吉（慶應義塾大学教授、美術史家）、財部静治（京都帝国大学教授、統計学者）、寺尾隆一（大阪高等商業学校教授、経済学者）、富田山壽（京都帝国大学教授、刑法学者）といった人々が研鑽を積んでいた。またベルリンと並び医学の中心であったミュンヘン大学には、数多くの医師や医学生も押し寄せており、明治初期では森鷗外や後藤新平もこの地に学んでいた^③。一九一四年の夏学期には二十四名の日本人

医学生が履修登録しており、これに加えて、学生という身分ではなく同大学で研究に従事していた者たちがいたことが確認できる。

今回翻刻で採り上げる大瀧潤家（順天堂医院、呼吸器科・内科医長）、鴻海蔵（千葉医専教授、眼科）、岡田日人（慈恵医学校卒、開業医（兵庫県）、産婦人科）、杉田直樹（名古屋医科大学教授、精神科医）のいずれもが医学徒であり、岡田は学生として、大瀧、鴻、杉田は研究者としてミュンヘン大学で警咳に接し研究に勤しんでいた。各人の手記には、七月末の大戦勃発から日独国交断絶から開戦に至るまでのあいだに、日本人の歓待、日本ブームの出現、日本がロシアを攻撃するという噂、そして反日ムードへの急展開、とこれまで紹介してきた他の地域と共通する様子がしたためられている。今回の翻刻記事で注目すべき内容の一つにドイツ・オランダ国境を越えたあとの叙述がある。しばしば退去や解放の手記はドイツ国境を過ぎるところで終わっている。この表現によつてわれわれはドイツを逃れた日本人が国境を越えて得られた安堵感の大きさを知るに至る。が、しかしこうした人々は越境によつて身の危険から完全に解放されたという訳ではなく、ドイツ国外に脱出してからもお危険に晒される可能性があった。オランダは中立国であったが、ベルギーがそうであったように、容易に戦争に巻き込まれる恐れはあったし、イギリスや日本への避難の際も、すでに海上船、潜水艦

による攻撃も開始されていたことに鑑みれば、避難民の心中も決して穏やかではなかったであろう。

オランダについては国内の雰囲気や平和宮の印象などが記されているが、中立国である同国でその中立を保つために軍隊が動員されたり、ベルギーのように攻撃されないように高く国旗を掲げたりと、中立国も大戦に否応なく組み込まれていった様子も活写されている。オランダからロンドンへ向けての叙述では、軍事優先による通常と異なるルートや少なくなった旅客船での人員輸送の様子に大戦の影響を窺うことができる。とくにアメリカがロッテルダム・ニューヨーク間については国で船を借り上げて公平に順番を割り当てたのに対して、日本の場合は自分達で手配することを余儀なくされたというあたりは、欧州の戦争から自国民を避難させるという課題への取り組み方の違いを示しており、興味深い内容となっている。

ところで航行中の危険に関しては、とくに杉田の手記ではドイツ巡洋艦エムデンがどれほど人々に恐怖を与えていたの可以理解される。エムデンについては日本の新聞でも報道されており、これに関連してインド洋から日本へ向けた周航便の安否とドイツの「狂暴さ」とが伝えられていた。エムデンによる民間船舶への攻撃のエピソードは、大戦当初のドイツに対するイメージ形成という点でも重要な事例を提供している。またエムデンの挿話は、日本が世界戦争に組み込まれて

いた状況を同時代の人々がどのように見ていたのか、その視座を知る手がかりともなっている。エムデンは青島を基地とする東アジア艦隊に配備されており、大戦勃発によりエムデンやその他の巡洋艦はドイツ領のあつた南太平洋を軸として、インド洋や東太平洋にまで展開することになった。欧州での戦争が世界戦争へと拡大した背景には世界大に広がつたドイツ海外植民地の存在があり、日本とドイツとの戦闘も大戦という網の結び目の一つをなしていたが、日本人民間人の移動をめぐる状況も大戦の結節点だつたことが記事から理解できよう。

バイエルン王国での抑留

さて首府ミュンヘンでは日本人の抑留という事態は生じなかつたが、バイエルン王国では二名の「日本人」抑留が確認されていた^⑧。一人はアン・ボクム (An Bokum) という朝鮮人である。アンについては、R・H・ヴィッピヒ氏の先行研究で言及されている。それによると、アンは伝道師の従者としてウンターフランケンにある聖ルードヴィヒヒ修道院へ向かう途上、八月末に当時バイエルン王国の一部であつたカイザースラウテルン (現在はラインラント＝プファルツ州) で拘束・収容されたが、教会の働きかけもあり、非敵対行為の「宣誓書」の提出をもつて十月二日に解放されている^⑨。

もう一名の被抑留経験者は長尾代五郎という料理人であ

る^⑩。長尾はアメリカ人の従者としてドイツを旅行中に第一次世界大戦に遭遇し、八月二十日にバイエルン北部の街ベルネック (Beneck) において、ホテルを訪ねた警察により「日本国独逸に宣戦せし故保護の爲め」として同日連行・投獄された。そのまま監獄で抑留され、その食費の支弁を強要されるなどした。十月二十八日に解放されたのちアメリカ領事館から旅券と五百マルクとを受領し、十一月三日にリンダウからスイスへ出国、その後マルセイユからアメリカへ戻つた。このリンダウへ向かう途上で、彼は身体検査のために降車させられ、その間に列車が発発してしまつたことで列車に置いてあつた荷物一式をなくしてしまつたという。抑留中に職も失つてしまつた長尾は、戦後、上記の被害やアメリカまでの移動費用に対して、精神的・金銭的損害補償を日独混合仲裁裁判所ならびに日本政府の救恤委員会に申請し、救恤は却下されたが日独混合裁判所での和解により償金を得ている。

第一次世界大戦期のドイツにおける日本人抑留はベルリン近郊やオランダとの国境地域でしばしば発生したが、今回のバイエルンの事例や前回採り上げたハイデルベルクでの事例のように、抑留箇所はドイツ国内に点在していた。いずれの事例でも、警察によつて逮捕・投獄され同地で抑留となつている。この点で、バイエルンの事例はなお不明の点もある日本人抑留の状況を明らかにするといふだけでなく、民間人収容所の代用として監獄での収容という、大戦開始から間もな

い時期における抑留のパターンを別括できる点でも意義深いと思われる。一方、バイエルの事例では朝鮮人の抑留問題も含まれていた。すでに植民地下に置かれていた朝鮮人の抑留についてはヴィッピヒ氏の論攷での言及があるものの、なお未解明の点が多い。こうした問題についても後考を俟ちたい。

【凡例】

なお翻刻に際しては、以下のルールに依った。

- ・ 適宜段落を整理し、句読点や中黒を補った。
- ・ 漢字は原則として新字体を用いた。
- ・ 同一資料内で表記が揺れている場合、編者が統一した場合がある。
- ・ 「」および「」の記述は、編者が付したものである。

四 大瀧潤家・鴻海蔵・岡田日人・杉田直樹

① 大瀧潤家「伯林及び倫敦より帰朝まで」(『欧州戦争実記』第九号、一九一四年)

予はミュンヘンに滞在して居つたが、七月初旬頃より紙幣の流用盛んで、正貨が頓に減じたので、不審な事だと思つて居る中、八月二日独逸は愈々露西亜に対して宣戦を布告したとの号外が出た。同時に外国人は即刻十二時間以内に国境より退出せよ、然らざる者は軍事探偵者と見做して拘留すると

いふ畏ろしい布告が町の到る所に公布せられた。そこで市中の騷擾は恰も鼎の沸くが如く、殊に外国人の狼狽一方ならず、各々荷物を肩にして東奔西走する様は見るからに憫然の情に堪へなかつた。市民は其の職業の如何を問はず、或は学生、或は労働者等皆列を作つて国旗を振り翳し国歌を歌ひながら市中を練り歩く様は実に畏ろしい権幕であつた。自分等も何時どんな恐ろしい目に合ふかも知れないので唯だざわ／＼して居つたが、意外にも五日の夕方或る新聞は号外を出して、此度日本は愈々露西亜に対して宣戦を布告し、同時に最早陸軍の一部は満洲に出兵したといふ報告であつた。予はまさかとは思つたけれども我々独逸滞在者に取つては之が非常な仕合せであつた。予は当時ミュンヘンに於ける大なる病院に居つたが、戦争が始まるや否や此の病院は衛戍病院に改められ負傷兵其の他の軍人を収容することとなり、殊別の患者の外は悉く退院を命ぜられた。そこで予は已むを得ず病院を辞し伯林に行つて一先づ戦争の大勢を確むることにした。

大挙出征後の伯林

八月九日ライプチヒを立つて伯林に向つた。その沿道には出征軍人慰勞の爲めにて珈琲、麵麩、菓子などは山を築いておつて、それを一々出征軍人に配布して居る、予も亦何程かの代価を払つて之等を求めた。然し是等飲食物の中に於いてアルコール類は一切見受けられなかつた。予が愈々伯林に着いたのは八月十一日で普通ならばライプチヒから伯林までは

十時間位にて着くが、今度は途中停車の爲めや、度々の乗換への爲め実に三昼夜の永き時間を費した。

愈々伯林に着いて見ると、市街の有様が前日とは全く一変して、何うしても之が昨日の伯林とは考へられない。出征しない若者は、其の平服の上に革帯を締め左腕に白布を纏うて、或者は剣を帯び、或者は猟銃を携へて、鉄道、橋梁、公園各市の出入口の哨所に立つて、補助憲兵補助巡查の役を勤めて居る。電車の車掌の如きも殆んど残らず召集に応じて、其の妻は夫に代り見苦しき平服の上に夫の帽子を冠り、夫の革靴を肩に懸けて切符を切つて居る様は漫る惘然の情を禁ずる事が出来ないのである。又各工場の職工等に召集令が下ると、召集時間の一時間前まで一生懸命働いて指定の時間を待つて兵營に駆け附けるといふ有様である。各監獄の囚徒までも其の作業の全部を挙げて軍資金に寄付して居る。其の他拳国一致して此度の大動乱に尽さんとする国民の熱烈なる赤心は到る所に発見することが出来る。予は大使館を訪うて此後自分等の採るべき方法を尋ねた。大使館では、最う英国も独逸に対して宣戦したのであるから此度の戦争は此俟ではどうも治まり相にも思へ無い、一日も早く帰国の途に就いた方が、好いだらうとの事であった。

そこで八月十五日伯林出発、十六日和蘭に入り、フラツシンゲンに出で、十八日此処より和蘭汽船にて英国に渡ると、近海には英国軍艦が威風堂々と遙かの沖まで続き渡り、潜行

艇水雷艇は其の間を縦横に駆け廻つて居る、又数台の飛行機は旺に空を翔けつて、立ち登る黒煙の間を潜り或は越えて警戒をして居た。茲に面白いのは船客の何人もが皆船尾の方へ集まつて船首の方へは一向寄り附かぬ、それは万一船が水雷に触れて爆発する場合には船首より船尾の方が安全であるとの考へからである。

倫敦の警戒

予は最初に始めて倫敦に来て電灯煌々昼を欺く市街の莊麗に驚いたが、今度来て見れば其煌々たる電灯は大部分取り消されて全く闇の巷と變つて仕舞つて居る。此光景に接して先づしみと戦争の悲哀を感じた。目下倫敦市民の最も恐れを抱いて居るものは、独逸の空中艦隊の襲撃である。倫敦は此の万一の変に備ふる爲め諸処に適當の防備を施して居た。

空中船の第一の目標となるべき光は悉く撤去せられた。倫敦市中の灯火は出来る限り最小限度に減ぜられ、各店頭の灯火、劇場其他を飾つて居た電光飾イルミネーションを点ずることを厳禁せられ、大路小路の街灯の尖端も黒く塗られ、旅館、料理店等は絶対に灯火の外に洩る、ことを禁じられた。其上探照灯は連りに上空を照射し敵の襲来を待ち構へて居る。又海軍飛行船は間断なく街土を飛翔して敵を警戒すると共に市民に幾分の安心を与へて居る、そしてトラファルガー衛園其他町の辻々には毎夜多くの市民が集まつて空を照射する探照灯の光を仰ぎ、愁ひの眉を擡めつ、戦争の未来を氣支つて居るとい

ふ有様であった。

航海の不安

予は倫敦に留まること十日余。八月廿九日愈々倫敦を出発して我が郵船会社常陸丸にて帰途に就くことにした。此の時予と同行を約して居た友人の中には常陸丸といふ名は日露戦争の際に玄海の沖にて遭難した事があるから次の便船にしたなど云つて彼地に留まつた者もあつた。九月三日の夜吾等の船がジブラルタル海峡近くに進んだ時不意に闇の中より一隻の軍艦現れ燎燦たる探海灯を真向より直射し恰も吾等の船を威嚇せんとするもの、様に思はれた。而して同時に「停船！」の信号は伝へられた。予等は不安の念に満たされて一同静まり反つて居ると其の軍艦は愈々近いて来た。良く見れば檣の上には英国々旗が翻々として居たのではと息吐いた。数回の何等かの信号は交されて我船は再び徐々と進行を初めた。地中海からスエズを経て紅海のプリム島まで来た時、敵の海賊軍艦エムデンがベンガル湾で英国汽船五隻を撃沈し、尚ほ諸所を荒し廻つて居るから注意せよとの報告を得たので、船客一同の恐怖は非常なものであつた。アデンからコロンボへ向ふ途中は全部消灯して、忍び／＼航海を続け、甲板上にては煙草さへ喫む事を禁じられたその中又エムデンの爲めに英船三隻が沈められたとの報を聞いた。コロンボ近くの海上で遙かに軍艦を発見したので「それエムデン」と一同は青くなつた。停戦命令に依つて見ると我が故国の筑摩で

あつた。此の時の嬉しさと心強さと謂つたらなかつた。一同甲板上に立つて万歳を唱へ或はハンカチを振り帽子を振つて騒ぎ廻はつた。

乗客の狼狽

十月二日の朝自分等の船がベンガル湾沖に差し懸るや、朝霧の中に又々遙かに一隻の軍艦を見出した。望遠鏡を手にして善く視れば如何にも三本煙筒らしい、而かも其の軍艦は此の憐れなる汽船を目標けて慥かに追撃するもの、様に認められた。さあ大変エムデンだ一てつきり「エムデンに違ひない!!」と云ふ声は甲板の何処よりも起つた。同時に自分等の汽船も全速力で急ぎ出した。船中は再び大騒ぎが初まつた。或はシャツ一枚となつて万一の支度に取掛る者もあるし、或は懐中物を固く体に結び附ける者もあるといふ有様、一時間二時間と経つに連れて其の軍艦は愈々大さを増した。其の日の午後二時に至り、突然殷々たる空砲は予等の耳を劈いた。それは軍艦より放つた停船の号砲であつた。我等の汽船は徐行に移つた。甲板上に集まつた一同の不安の眼は軍艦に注がれた。其時は早や肉眼にても十分見得る位置に追附いて居たので艦尾に樹てた国旗をも視る事が出来た。それはエムデンでは無くフランスの一駆逐艦であつた。我々の不安の眼にはそれが如何にも大なる三本煙筒の軍艦としか写らなかつた。「鼠一匹に驚かされたも同様だ」などと一つの滑稽談に終つた。シンガポールに到ればもう内地に着いたも同然だと船中

の一同は不意に元気づいた。(談筆記)

② 鴻海蔵「独逸は戦慄せり 鴻千葉医専教授の書信」(『東京日日新聞』一九一四年九月二十七日)

△兎やモルモットの銃殺

△十二歳の少国民も出陣

独逸ミュンヘンより英京倫敦に遁れたる千葉医学専門学校教授鴻海蔵氏が最近菽生校長に宛たる書信左の如し(前略) 去七月十九日民頭を發し、和蘭、白耳義を経て英京に渡り候処、塙塞の國際談判日に非にして独露の国交破裂せんとするの勢ひを呈し候に付(八月一日)和蘭に入り辛くも独逸国内に到着候処、独逸は動員の最中にて流石の交通機關悉く軍用に充てられ、人民の交通は殆ど犠牲に供せられハンノーベルより民頭まで平素十余時間の距離を五日間を費やして(昼夜兼行)漸く民頭に帰着候。民頭は戦線を遠ざかり且塙国に接し居候為、割合に動揺少なく市内の秩序も尚整然たるものに候ひしが、然し各教室は教授連を初め医員悉く召集され空屋となり動物は飼養の道なく、学長の命令に基き小使ピストルを以て兎、モルモット、羊其他試験動物を撲殺し、教室の費用を停止して軍費に用いると云ふ騒ぎに相成り、男子は十二年以上六十歳以下のものは一切軍役に出づるといふ次第にて(中略)已に百万の兵を仏国に向はしむるの準備整ひたる大決心を示し居り候。此間に於て伯林間の音信は屢杜

絶して大使館よりの消息明かならず(中略)十四日深厚伯林に到着、夜中大使館に至り候処、「在独日本人は晚くも明夜までに伯林を去つて和蘭へ入れ」との訓令に候(中略)船越氏の云ふ処にては「何事を差置いても英国まで立退け。戦局の推移によりては生命安全なり難し。万事は自分が引受けるから一刻も早く」と云ふ切迫したる事に相成り、大使館に於て徹夜にて在留邦人立退きの為めに、各自欲する丈け幾らにても持つて行けといふ調子にて旅費を貸与し居り火事場の如き騒にて、伯林在留者は荷物を大使館に預け、民頭のもは民頭に託して荷物を残留したるまま十五日夜十一時伯林を發して和蘭に向ひ、途中再々汽車を更換し、或夜は灯火なき暗黒の車内に仮睡したる杯は易々たるものにて(中略)和蘭へグに到着(中略)同市へ一泊の上翌十九日ウリシユンゲン「フリッシンゲン」より乗船し倫敦に到着いたし候(中略)石原君(千葉病院司療医)は維也納と伯林、民頭の不通過の為め目下何れへ避難し居らるか明かならず(記者曰ふ石原氏は無事帰朝の途中)倫敦に於ては独仏塙瑞は勿論大陸よりの避難邦人一時に集合致し候為め、大使館領事館も日夜訪客充満し騒然たるものに候。殊に米人の引揚の為重米利加線は殆ど杜絶し、日本郵船の地中海廻は十二月末までは一、二等満員にて目下乗船の見込みなく、已むを得ざるものは三等乗船の外道なく、夫れすら既に来月発船の宮崎丸も切符買取りは六ヶ敷からんとの事に候。地中海は英仏艦隊にて

独艦隊を圧迫し居り候故大抵は安全なれども、大西洋上にはメキシコを遁竄せる独艦六隻行方不明の爲め航海危険なりとの報告に接し候（中略）アムステルダム（和蘭）に戻り度存じ居り候。同眼科教室は先回の旅行中見聞せる処によれば却々整頓し居り、殊に病理学の方面には設備も完全なる所に候間、同所へ参り度き志望に候（中略）昨今露国の学生が間諜と誤解され、途上にて銃殺され、英人が刺殺されし杯、独逸国内は頗る危険の状態に陥り居り候（後略）

③ 岡田日人「命からぐ、倫敦へ」岡田医学研究生の遭難——『神戸新聞』一九二四年十月二十一日

一昨年秋、渡欧して独逸ミュンヘン大学に二ヶ年医学の研鑽に努め、後伯林にて実地研究中欧亞の動乱突発して這々の体にて敵國を脱出したる県下魚崎出身の岡田日人氏は、滿洲に微笑を含んで危地を脱したる當時の状況を語る。巴里はもう陥落しましたか？まだ！私は最後の伯林脱出者の一人です。一日遅れた邦人二名は獨蘭國境で拘禁された位ですから、全く危機一髪といふ処でした。七月二十七日塙塞開戦の報あり、予後備共悉く召集され全國の自動車は殆んど全部徴發されたが、市民は尚日本を信頼して日本は近く露國膺懲の師を出して露の背後を衝くべしと信じ、邦人さへ見れば握手を求めて酒屋に同行を乞ひ、無理無体に麦酒ビールを勧め、私の如きも二三回胴上げせられました。八月四日駐独大使が在留邦

人に引揚を命ずると市民の態度は俄然一変した。六日の新聞には東京電報として日本は日英同盟の關係上局外中立を躊躇し居れりと報ぜられ、市民は憤怒の極邦人にも露仏國人同様の暴行を加へかねまじき勢あるより、船越代理大使は各新聞紙をして日英同盟は歐洲の戦乱に対して何等の關係なしと報道せしめたが、何等の効果はなかつた。八月一日以来通信は杜絶し、群衆よりは盛んに罵言を浴びせられ、或は邦人と見れば一も二もなく軍事探偵の嫌疑を以て逮捕するなど凶分殘虐を加へた。私は民頭ミタウに重要書類を残しありしたため十一日急遽伯林を出発して十五日民頭ミタウに到着したが、其翌日急ぎ引返せとの電報に接し直ぐ伯林に引返した。各所の停車場は軍隊を以て嚴重に警護し鉄橋仮路には在郷軍人をして守備せしめ繊弱なる婦人さへ銃を手にせるのを見受ました。数回の身体検査を受け二十日漸く伯林に着きましたが、今思ひ出すと滑稽で噴飯に堪へぬのは、携帯せる齒磨粉を爆弾に間違へられすんでのことことで投獄の憂目を見るのでしたが辛くも免れました。着伯早々日本人俱樂部に駆け付けたが一人の邦人も居らず、大使館門前に二名の巡查に護衛されていた。大使の注意によりて其俣停車場に駆け付け命からがら倫敦に避難した、其夕井上駐英大使は予等避難民を招き慰勞会を開かれ、席上須藤博士、曾我廼家五郎夫妻、柴田環女史等に出会し、廿九日常陸丸に搭じて倫敦を出発した次第です。

④ 杉田直樹「独逸落ち——開戦当時の独逸国内地の景況」

〔社会及国家〕第三卷六号、第五卷一、一九一四年、

一九一五年、

(一)

○暫らく筈を引き擔いで異境の客となつてゐたので読者と筆硯相背していたこと久しかつたが、今度の戦乱で臆病風に追はれて最先きがけで帰朝して来た。再び本誌上で駄筆を呵して相見ゆるに當つて一寸久闊の辞を申し述べらる。

○此度の欧洲の戦争を或人が評して「まるでランプの焼けきつたホヤへ濡れた指を触れたやうに一時に滅茶苦茶ひゞが廻つて了つた。思ひがけない辺までひゞのいるものだ」と云つたが誠に適評だと思ふ。此の騒ぎの突発前迄自分は南独逸の山青く水深き民賢ミコトヘの都に、其の敬虔の念厚き善男善女と共に今でも古都の佛をその俣に偲はせる聖母教会堂フラウエンキルヘの重くらしい鐘の音を朝夕の友として、近代的の香ひのまだ十分に浸み込まぬチロル嵐しの風を吸ひつゝ、古い建築で立て連なつた古い街路を往復しては、政治とか国際とかいふことに夢にも思ひ及ぶこともなく、ひたすら昼は教室に夜はカフェーに劇場に独逸のならばしの奇異なのを見聞きすることにのみ励んでゐたのであつた。

○MNNといへば世界に重きをなされてゐるといふ南独逸一の大新聞『民賢新報 Münchner Neueste Nachrichten』之が自分等にとつて唯一の政治智識の注入機関であつた。勿論

政治経済方面の専門家は同胞でも中々多方面に独英仏の新聞を漁つて居られたが、吾々弥次連はまづ之れ一つで万事を呑み込んでゐたのである。所がこの新聞が半官報でカイゼルの御動静を報ずるに余りに慎重であつたために吾々には七月二十五日迄戦雲が北欧の野に漲つて斯かる驟雨を呼ばうといふやうな気が全く秘されてゐたのである。七月二十六日午後六時!! それはセルヴィヤ国が奥太利国の送つた最後通牒ウルチマエツムに対して回答を与ふべき最終の指定期限である。フェルゼナンド大公がバイエルン王ルードウィヒ三世の甥だといふので夫の暗殺事件以来フランツヨゼフ老帝の心事を懐ふと共に此の老王の胸をも察した南独の民の敵愾心をそゝるやうに筆を極めた新聞の力が、今や緊満極度の気分で民賢市民の腕に血を充たしめてゐた。此夜は電灯の火影淡き各公園や辻広場フラッツの青葉を陰に数十の人々が群れゐては何となく穩かならぬ氣勢を張つてゐる。カフェーの広間では国歌の奏樂に煽られた赤ら顔の一団がそちこちにビールの杯で卓を叩き乍らフーターランドと、高らかに唱歌してゐる。

○果せる哉セルヴィヤの回答は一日延期との号外が夕暮の街頭にアーク灯の光のまだ勢せいのない頃辻々に張り出された。戦争になるだらうか、カイゼルが仲裁するだらうか、ナニ露西亜がセルヴィヤを助ける決心ならこの戦争は必ず破裂する、そしてその曉には独乙も奥国を助けて中欧に火花が散らう、しかし独乙が立つと聞いたら露国は手を引くだらうなど、道路

の人は勝手勝手にその号外を批評してゐる。

○翌夜愈々セルヴィヤの回答が甚だ不満なものであるといふことが号外で発表せられた。今朝露国から非常な長文の暗号電報がセルヴィヤの朝廷へ届いてそれで急にこんな強硬な回答をするに至つたのだと知つたか振りに注釈して歩く物好もある。既に奥国は今夜出兵してベルグラードを占領する予定であると誠にやかに声を潜めて話している人もある。群衆はビールやワインの勢ひでたゞあてもなく大声を發し乍ら大通りを練つて行く。広場々々へ来ては万歳を叫んでゐる。新聞社の前は身動きもならぬ人ばかりで、新聞社では三階の辺りに大きな白い幕を垂れて今にも急報が来たらば幻灯でそれをこゝへ写し出さうといふ仕掛け、人民はそれを待つ間に折々氣勢をつけては国歌の合奏をやつて万歳を叫んでゐる。吾々も此渦中にもまれ乍ら此夜は一夜あちこちを彷徨ひ歩いた。

○その深夜の出来事である。民賢目抜の場所カルルスプラッツのすぐ近所にカフエーファアリヒといふ大きな旅館兼カフエーがある。その筋向ふにある之も甚だ大きなカフエーフェルステンホーフといふのがある。此後者には日本の時事新報などが備へつけてあり又氣持も頗るいゝ、カフエーなので吾々仲間がよく玉突きに出入する場所であるが、二十八日の深夜ファアリヒにのんでゐた大勢の客がその音楽隊に独乙国歌を合奏してくれと頼んだ。所が丁度其当時旅館にセルヴィヤの旅客が二人泊つてゐてそれが今広間でカフエーをの

んでゐるといふので樂士長がそれに遠慮して国歌吹奏を断つた。といふのでいきり立つた一同の愛国の士は俄に鬨を揚げてテールや器物の破壊をおつ始めた。御承知の通り独乙の市街はアスファルト石や石で壘んであるので往来に礫がない。そこで氣の利いた奴はいきなり自動車をとばして郊外の河原から自動車一ぱいの砂利を運んで来た。この新著の武器を投げつけて群衆はとう／＼このカフエーの表硝子を皆破壊し更に余勢を駆つてその向ふ側のフェルステンホーフへ押しかけた。誰云ふとなくその経営者はセルヴィヤ人だといふことで、之も不意打をくつて咄嗟の間に多大の損害を受けた。流石に焼打はしなかつたが群衆の力は民賢も日比谷も東西選む所はない。

○翌二十九日にはいよ／＼奥国はセルヴィヤに対して宣戦の布告をした。人心は益々いきり立つて来て、今日にも独乙は露国に宣戦するだらう。仏国は露仏同盟から露国側について之も宣戦するだらうと伝へられた。新聞は世界戦争といふ題を掲げて必ずや歐洲全土の大戦乱を招くであらうと論じてゐる。巡查は一方切りと露西亜人などを物色して何やら検査を始めたらしい噂が立つ。物価はそろ／＼昇り出す。芝居や寄席は毎夜毎夜の市内の示威運動に氣を吞まれてバツタリ客足が減つたとの事。同宿の同胞四五が倫敦の月巴里の花を眺めるといつて此月二十日に連れ立つて何の予想もなしに民賢を立つたのに、その人々から面白おかしき日々の便りが来るに

つけ、今日あたり巴里の市民は矢張り同じくこんな血の漲るに任せた蠢動をしているだらうとそゞろ友の観察が早く聞きたいものと思はれた。

○三十日の朝号外が出た。日本大使は奥国外務大臣と昨日二時間に亘る秘密会談を遂げその結果日奥同盟成立せるもの、如し、即ち若し露奥戦端を開くことあらば日軍はシベリヤの背後より露は衝いて奥を助くべしといふ文言であつた。日本人最負の或男などは四辻の号外掲示場からわざ／＼其全文を写しとつて来て自分に呉れて万歳を叫んだ。此夜日本人は到る処で歓迎を受けたさうな。カフェーへ行けば同じ卓の者共がビールを振舞つて而して何やかやと話しかけて来る。往來や電車の中などで見ず知らずの者が握手を求め乍らうるさく日本の戦闘方略を尋ねに寄つて来る。後で聞けば伯林でも辻々で同胞が盛んに胴上げをされたとやら。日頃は往來で独乙人にヤパネーゼ／＼など、云はれて内々気を悪くしてゐる同胞も、今日は日本の国威が全欧を呑んだやうな心持ちがして、持てるのがやたらに嬉しかつた。絹製の日の丸の小旗を胸につけて意気揚々とカフェーを闊歩したらその旗を売つてくれと云はれたのも此夜であつた。

○しかし市民は一般に騒然としてゐた。日中は不安乍らもその胸を抑へて平常の如く事務を執つて居る人民が、夕べの黒幕がそろ／＼下り始める頃からビールの臭い息を吹き乍ら辻々に附景気の示威運動に馳せ参する。そして夜つひてあて

もなく夢中遊行のやうに市内を練つて歩くものらしい。そしてその人々の口吻には戦争のため自己の地位財産にどんな影響が来るだらうかとたゞそれ斗りを考へ悩んでいることがあり／＼分る。或は預金全部を瑞西へ書き換へたとか俄に転国するとかそれは日本人としては考へにだも及ばない妙な計画が方々で行はれたらしい。

○三十一日の朝の号外には仏蘭西の一飛行機が遙にエルザスロートリンゲンの思ひ出多い空を掠めて民賢の北五十里なるニュルンベルク of 古都を襲ひそこに爆弾を投下したとあつた。民賢市民は之を既に仏国が挑戦したものと考へて更に更にいきり立つた。此時既に露国や仏国の留学生などは同業者共から盛んに迫害を受けてゐると噂さに立つた項であつたが、これからは市民一同が酔に乗じて露仏人に暴行するといふ風説が起つた。然るに新聞紙は却つて冷静を装ふて仏国が宣戦もせず又宣戦する理由も持たずに無暗に独境に其軍事行動を誣ふる如き理義を弁へざることをする筈はない。之は恐らく此飛行機に乗組んだ将校に私怨でもあつて爆弾投下のいたづらをやつたものだらう。被害者は其士官を相手取つて国際私法上の告訴を提起したらよからうなど、白ばくれたことを載せてゐた。

○元來独乙の新聞は今から考へ合せて見ると皆政府の内意を受けて人民の対カイゼル感情を出来るだけ円満にしやう、社会党の勃起をなるべく防止しやうと努めたらしい。カイゼル

の底意を少しも揣摩することなどはしない。だから独乙の人民は―吾々も独乙の新聞斗りを読んでいる間は―カイゼルが歐洲平和のため人力の及ぶ限りの人力をした、自ら屢々親書を各関係国の元首に送つて事の和解を望んだけれども、露国は無断で動員して境境へ兵を集める、仏国亦之と共に兵を独境に送り以て独乙を威嚇窘迫しやうとしてゐる。是に於て乎カイゼルは自国の安寧防御のためやむを得ず動員を行ひ且つ戦時状態におかねばならぬこと、なつた。汝人民亦宜しくカイゼルの已むなき衷情を察してどうか相共に祖国の歴史の光譽を傷けざらんために戟を取つて防戦の軍に立つて呉れよと頼んでゐる。連邦の一たるバイエルンの王に送つた出兵の依頼状などは丁寧を極めたものであつた。以て如何にカイゼルが人心の緩和に心を用ゐ、開戦に就て国内の不平を買はざらんことを是れ努めたかゞ分る。だからいよゝ開戦と定まつてからも国民誰としてカイゼルの措置に非をうつものはない。皆国難の防御のため進んで軍国の事に当り勇んで戦場に走つた。而して層一層に露人仏人を怨み怒るのであつた。

○七月三十一日愈々露国と宣戦を布告した。此夜の市民の昂奮は非常なものであつた。恐らく露人は外出が出来なかつたであらう。吾々が教室へ行つても同僚達は昨日俺と同宿の露国学生は軍事探偵の嫌疑で拘引されたとか、或は自分の向ふ側に住んでいる露国人は今朝家宅搜索を受けたとか云つてそんな噂で持ち切つてゐた。元來露国はあの大国であり乍ら大

学の施設が完全してゐないので、医学生などは中学を出ると直ぐに独乙の大学へやつて来る。殊に民賢は試験が容易といふ評判で平素から沢山の露人が入り込んでゐる。そのため昨年十月民賢大学では露国学生排斥の案が出て危ふく日本人まで傍杖を喰つて大学入学禁止を食ふ所だつたが、日本人の方は條件附で従來の俣となつたことさへある。こんな風に露人が沢山入り込んでゐるから斯う戦争となつて見ると警察では此露人追払ひに少なからず胸を用ゐたに相違ない。

○之は後日の話のだが、其の当時露国人で目下手許に何程かの纏まつた現金を持つてゐない者は、本国から入金の道はなし未始終は盜賊でも働かないでは独乙国内で生活して行くことは出来まい。それでは独乙人民が迷惑するからといふ理由で金を持たぬものは皆保護してやるといふ名目で引つ捕へて了つたさうである。之は後に東普地方の塹壕堀鑿の工夫に使つてなにかの賃錢を与へて衣食の道をつけてやつたとの事であつたが、いゝ迷惑な話だ。在留邦人も後に多数拘禁されたといふが、或はこんな目に逢はされてゐたのではないかと想像される。

○明くれば、八月一日此日を以て独乙全国は戦時状態に置かれたのである。辻々に張り出された市長の告示によるとそれは綿密に戦時の注意事項が掲げられている。郵便は交戦国へは一切差し立てぬ、交戦国以外の外国へ差出すものも独乙文にて明瞭に認め開き封となし、官憲が検査の上可と認め

たもの、外は取扱はぬ、小包郵便は内地と雖も扱はぬ、外国電報及び外国為替は凡て扱はず、鉄道は当分軍隊輸送のため普通旅客はその列車に余席ある場合のみ乗せてやるが、定時には出ない、外国へ行く旅客のためには民頭からは瑞西の境リンダウを越ゆる一線のみしか通過を許されぬ。徒歩或は自働車等に依り市外の国道里道を通ることはならぬ、万一通行の際番兵の誰何に應じないものは即座に銃刑にする、皇宮兵營鉄道附近等へ近づいてはならぬ犯すものは銃殺する、其外何くれとない細かい布告だ。なほ之に附加して注意書して曰く、外国人はなるべく市民の亢奮を買はざる様各人謹慎せられたし、若し当国の迷惑となる如き外国人には警察より二十四時間内に独国退去を要求すべし、但しよし交戦国人民と雖も敵意を表し又は軍事上の嫌疑等あらざる場合には警察は十分の保護を与ふる方針なるも、亢奮せる市民が如何なる暴行に出づるやはずめ知り難きを以て各自夫々注意を加ふるを要す。身元証明ある者は念のため外出の際之を携帯すべし。云々。

○一日の朝には民賢市中に一恐慌が起つた。それは水道源地の辺で怪しい露国人が捕へられた、何だかコレラ菌か毒薬かを水道中へ投じた形跡があるといふ風説が嵐のやうに市民の耳に吹き渡つたのである。一時は非常な騒ぎで各病院試験所等は一齐に急々飲料水試験に従事したが、正午頃になつて何処の試験結果も皆同様に無菌無毒といふことに極つたとい

ふので、市長から直ちに辻々へ風説の虚報なる旨を揭示させて漸く市民の安堵を得たのである。何しろその時分の市民一般が神経質になつてゐたことは夥しいもので、

○八月一日の朝自分の下宿の婆が心配さうな顔をしてやつて来て云ふには、ドクター大変なことが出来た、今日から一切の店では紙幣を受取らない、今朝買ひ出しに市場へ行つたが金貨でなければ売らぬといつた。それに一人前肉三斤砂糖一斤玉子十個以上はどうしても売つてくれないそれが二倍方の騰貴をしてゐる、だから先月の下宿代はどうか金貨で払つてくれまいかといふ話。之を聞いて自分も当惑した、実は今朝之から銀行へ行つて預金を引き出して払をしやうと思つて居た所だか紙幣が通らぬあつては差当り昼めしを食ひに行くにさへ差し支へる。とに角銀行へ行つて金貨を貰つて来やうと二三の友人を誘ひ合して共々此処の独乙銀行支店へ行つて見ると入口の所からみつしり溢れる斗りの人だ。皆こんな風説を信じて金貨の取り付けに来たものらしい。吾々も辛うじて構内へ入つたが、中々受付の窓口へ寄れさうにもない。漸く受付け貰つたが扱受取りの段になると百マークの紙幣で渡さうとする。今時百マークの札がどこへ行つてくづれるものか、どうか金貨で呉れといふと、金貨はもう無い、二十マークの紙幣を交せてやるから之で承知しろといふ、紙幣は通用しないと云つても、そんな筈はないといつてとう／＼金貨は一片も払つてくれない。全く此日は金貨の支払ひを停めて了

つたものと見えて皆不平たら／＼こぼし乍ら紙幣を握つて帰つて行く。果然同日午後警察の告示に曰く、市民は紙幣に依る取引きを拒むを得ず、紙幣は平時の如く流通すべし、若し紙幣の支払を受くることを拒める商店あらば告訴により警察は直ちに其営業を停止せしむることあるべしと。之を見て下宿の婆もどうやら安心して吾々の紙幣の支払ひを受取つた。そして偶然持ち合せていた百マーク許りの金貨を大切さうに財布に収めて之は戦争のすむ迄使つてはならぬと云つてゐた。

○聞く処によれば、七月の下旬以来銀行は金貨の支払ひを吝んでゐたとやら。さう云はれて見れば自分達も七月に入つてから金貨を新たに手にした覚えがない。して見ると早くから政府が金貨収集をしてゐたといふのは事実らしい。一日来料理店などで二十マークの紙幣を出すと釣銭がないと云つて給仕が迷惑さうな顔をして見せるが、金貨を見せると引つたくるやうに持つて行つて幾何でも釣銭を出してくる。紙幣発行元の大蔵省でも取付を恐れて今日告示を出した。曰く、金貨引換を要するものは其全高竝びに要求者の住所姓名を明記せる願書を予め提出すべし、其順序に依り一週間以内に引換ふべき通知を發すべし、但し其最高限度を五百マークとす。

○民賢に七月一日より九月卅一日までの予定で大規模の瓦斯博覧会が開かれてゐた。抑も瓦斯の製造の材料設備からその工場の模型、副産物の精製その仕上げの光景運搬の方法に至

り、又瓦斯応用の各種工業竝びに庖厨製菓の現場迄一々實際的に作り、之を用いて其場で御馳走を拵へて客に接待してゐる。一方には瓦斯分析の方法からその実験の装置竝びに其産出高応用方面の統計など綿密微細に亘つた學術的出品もあつて吾々日本人には事珍らかな大仕掛な有様に驚いてゐた位である。所が八月一日には開場僅か一ヶ月にしかならぬ此博覧会場を俄に閉鎖してその設備を全部とり外し全く取り片附けて忽ち軍馬の徵發所に変へて了つた。この博覧会場のあつた所は誠に閑雅な人工的の公園になつてゐて、此内に高尚な劇場もあり日本式な操人形の芝居もあり、其外射的や馬乗り二靴などの遊戯場もあり。一寸した料理店やカフェーバーなども備はつて、吾々平素の絶好の散策場所となつてゐた。殊に自分は宿も近いので毎夕ババリア建国記念の勝利の女神の偉大なしかも温容人なつこい姿の銅像を訪うては其の帰りに此公園の緑蔭を一巡する習慣であつた。昨日に変わる今日の騒動一日からは門衛の兵士厳めしく吾々は近づきもならぬ。此の高台から一眸の中に在るレレージエンウイーズーゼーの広い運動場を打ち眺めつ、あ、此女神も之から如何なる運命の發展を観察することだらう。蠢めく兵士等は再び戻つてどんな感慨を以て此の女神に対ふだらうか。女神の後ろに立つルーメスハルレの中に祭らるゝ、幾十の建国の勇士よ、切に其の靈もて此の蠢めく兵士等の福祉を護つてやれと坐るに転變の激烈な今日の光景に見入つたのであつた。

○市中は軍人で溢れる許りだ。殊に停車場附近は之等出征の軍人とそれを見送る男女の群で身動きもならずどよめいてゐる。相思の兵隊さんと下女さんとが相擁して発車間際の列車の窓側に寄り添ひ乍ら人目憚るやうな接吻を交して又お目にかゝりませうと挨拶してゐる有様を見ると水盃して出征を送るならばしを見てゐる我々には甘つたるくて歯痒いやうな気もするが、往來を三々五々手を引きつれて歩いて行く兵卒が吾々の姿を見て挙手し乍ら日本万歳などとお世辞をまいて行くのに逢ふと十年前に露の大国を仆した日東帝国の威武を負へる吾々は何となく云ひ知れぬ嬉しさに涙が出る。独乙人は自分等が恐るべき露国を相手に戦はねばならぬ運命になつた今日始めて自尊の兜の庇の下から其露国を苦もなく破つた日本国の偉さを悟つたものらしい。此頃の新聞には三行なり五行なり日本に關した記事の載つてゐない日はない。吾々は何よりも之が嬉しかつた。兵卒の服装は日露戦争以後日本の真似をして改良したといふ新軍装、それは草色が、つた鼠色の羅紗服で釦は遠方から見て光らぬやうにと光沢消しにしてある黒ずんだもの、帽子は少しく黄を帯びて前庇がないので大黒帽を後ろ前にかぶつたやうで日清戦争の時の支那兵然としてゐる。練兵で道足の時には帯皮で小銃を背中へ背負ひ込んで両手をぶらんくして歩ひて行く。

○此頃から兵卒軍人にビールを売ることが差し止められた。停車場附属のビュツフエーでは一切アルコール含有の飲料を

兵隊さんの景氣づけに用ゐてはならぬといふおふれで、そのため後に吾々が民賢落ちをして伯林へ逃げのびる汽車旅の道すからもこのビール禁止の影響で鉄道沿線の料理店が閉鎖してゐるので、少なからず飲料に困難した。独乙人は平素ビールをのまぬ日とてはない。料理店では平生食事の際にビールを飲まない客には罰としてでもあるまいが多少の割増金を要求する位ビールの痛飲を強制してゐる。そのため平生もビール氣がないと働けないといふ様な人間が甚だ多いのに、今俄に戦場でビールを断つたならば或は禁忌症状を起して働けなくなる奴も出来て来はしまいかと、ふだん独乙人は皆酔つぱらつてゐる者と心得てゐる吾々には聊か心許なく思はれる位で。

○八月二日カイゼルは白々しく『仏国は昨日來動員して兵を我國の国境に集めつつありと云ふ。依て朕亦祖国の名譽を保護するため動員を命じ本日以後仏国に対して戦時状態に置く』と宣言した。何ぞ知らん自分の教室に勤務してゐた小使は一昨日カイゼルの召集令を受けて既に西方エルザスロートリンゲンの要塞のかたみに出發してゐるのに。

○此時分から独乙の軍事行動の一般方略として伝へらるゝ所は一挙仏都花の巴里を蹴散らして後馬面をかへして露の雲霞を支へやうといふことであつた。独乙人は露国が動員完結迄に一ヶ月を要するといふことを唯一の乗ずべき弱点と考へてゐた。そして皆を挙げては露はあまりに野蠻也、以て文明

の敵に非ず、私はあまりに墮落せり士氣遂に撐ふべからず
 Russe zu barbar, Fronzose zu degeneriert」と叫んで僅に自ら慰
 めてゐる。しかし日本人さへ見れば万歳々々、時に日本は露
 国とまだ戦を始めないのかと血眼で尋ねる所を見れば、如何
 にも彼等が内心自己の力を危ぶんで露を恐れていたかゞ分ら
 う。

○此時分から吾々の所へ宛てられた郵便が一通も着かない。
 此項に到着すべく当てにしてゐた文部省からの糧の代がまだ
 つかぬ。書留郵便だからつかぬことはあるまい。露国と開戦
 の当時には既にあの手紙は露独の国境を超えて独乙の領内へ
 入つてゐたに相違ない、明日はつくだらうなど、相互ひに語
 り合つて、しかも内心は懐に余す処四百マーク足らずで之で
 は今月一ぱいも楽々とは支へ切れまいと考へると、何となく
 物寂しくてならぬ。金さへあればこんなな持てる独乙の国で
 千載一遇の此歐洲大戦争をゆつくり観戦して行かうではない
 かと仲間相寄つて興じてゐたのに金が着かぬとあつては万事
 休焉だ。それでも此際独乙人民への御機嫌取りに我々無けな
 しの醜金して赤十字へ恤兵金の寄附でもしやうではないかと
 いふのでなにがしか宛の献金をしたものだ。今考へると無駄
 なことをしたものだ。

○八月三日郵便局からお前へ宛てた郵便物があるから身元証
 明書を持つて受取りに來いといふ差紙が來た。同宿の石倉七
 高教授が閑暇だから様子探り旁々瀕踏みに行つて來やうと云

はれたので自分等は其模様によつてあまり面倒でなかつたら
 ば後で受取りに行かうといふ考へであつた。其日の午後石倉
 氏が大きに憤慨した調子で語る処を聞くと左の如し。朝旅行
 券を持つて郵便局へ行つた処、此処には郵便物はないから通
 信省へ行けとの事で早速数町離れた通信省へ行つた。所が旅
 行券だけでは手紙は渡せないから直ぐに政庁へ行つて公式の
 身元証明を作つて貰つて來いと命ぜられた。電車に乗つて余
 程かけ離れたバイエルン政庁なるものへ着いて見ると既に身
 元証明貰ひの人達で樓上は一ぱいだ、中には地着の独乙人ら
 しいのも沢山ある。漸く自分の順番の來るのを待つて窓口へ
 近づき身元証明がほしいといつて旅行券を出して見せたら此
 用紙へ住所姓名職業等を記入し五十片の手数料を切手で収め
 同時に之に貼附すべき写真を此近所のこれく云ふ写真師で
 早速写して來いとの事。そこで惚々云はれる俣の写真屋へ行
 つたらこゝにも多数の人が詰めかけてゐた。それでも一マル
 ク五十片の金と一時間三十分の時間とをつぶして早取写真を
 一枚作り、漸く之れを貼りつけて再び政庁樓上で小一時間の
 立往生をした結果辛うじて得た身元証明書が勿驚有効期限発
 行当日限りといふ貴い物。しかしまだ小言も云はずに又々通
 信省へ立ち戻つて之れを示し渡された郵便物は一戦争の始ま
 る一週間も前に倫敦の旅友達が呑気な旅日記の断片を書き送
 つた繪葉書一葉であつた。可惜二マルク余りの金と半日の時
 間と多大の辛勞を費してその償ひが一葉の用なき葉書とは。

此の話聞いた吾々はとうとう政府へ出かける勇氣を持たなかつた。

○八月三日には自分の通勤してゐた民賢医科大学精神医学教室の職員研究員の八分通りが召集令のために浚はれた。元独乙には徴兵猶予といふ得点がない上に例のカイゼルの軍国主義のために余程の不具者でない限り壮丁は殆んど全部兵役にとられる。だから大学の学生でも教員でも大抵皆一度一年志願兵をやつて来た予備兵である。かういふ国難の折柄予備兵が軍旗の下に馳せ参じたら学校や工場は凡て空虚になつて了はねばならぬ。而も医科の病院で助手や医員を勤めてゐた者も軍医として応募するのではない。皆一兵卒として戦場に赴くのである。自分等の教室で日夕卓を共にした談論風発の友も皆今日から喇叭の音を以て働かねばならぬ運命となつた。而も彼等は少しも学を抛つて銃剣を取ることを厭はない。一人の若い私講師は戦争の準備だと叫んで廊下で蝙蝠をやつたり梯子段を二三段づつ、一跨ぎに上り下りして騒いでいる。自分を呼んで曰く、君この段々を二段づつ、一度に上るのは易しいけれど二段づつ、一度に下りるのは余程練習せんと出来ないうぜ。小使は悄然たる面色で無言で此日自分の宛がはれた抽出しを取片付けていた。

○民賢では大学所屬の各病院を早くも予備病院として使用するの案を立てたものらしい。自分の通勤してゐた病院の院長は八月三日に自分を召んで実は此病院も近々軍事用に徴發さ

れることになつて其準備として研究室や診察室の用のない部屋はすつかり片付けて何時でも負傷者收容の病床を取付けられるやうに支度しておけといふ命令を受けた。お前の作業してゐた室も掃除して片付けて了ふから続いて研究をするならば隣りの小さい室へ道具を移してそこでやつて貰ひたい。尚医員も大部分徴収されて了つて三四人しか残つて居らぬ。誠に手が足りなくて困るが月々五十マーク位の補助をするから折々病院の方を手伝つては呉れまいかといふやうな相談をうけた。事情さへ許せばいくらも御手伝ひませうが、何分吾々も本国からの送金が杜絶してとてもこの俵ではこゝで生活して行く見込みもない故、もう二三日待つて大使館から沙汰がなければ一応当方から学資の相談に伯林まで出掛ける所存である。其交渉の結果が分る迄返答を猶予して貰ひたいと答へたもの、此頃の吾々の心中の不安は何にたとへやうものもない。若しも此の俵金が一文も来なかつたらといふことを想像すると一刻も落ちついて顕微鏡など覗いても居られない。その中に小使はもう扶養の見込みがないといふので今迄飼養してゐた実験用の動物と大きい羊や猿はピストルで射殺し、小さい兎やモルモットは籠話にして火葬場へ送る支度をする。まだ試験に供したくない未接種の小動物はその俵檻に詰めて獅子の食餌に寄附するべく郊外の動物園へ送るといふ。学者も町人も均しく国難のために周章し狼狽し天手古を舞つてゐる。

○満十七歳以上の男子で兵隊義務のないのは凡て義勇軍として此際申出づべし数週の練兵の後戦闘に従はしむといふ募兵の男子は刈入れやパン焼きをして兵站の事業を助けよといふ広告に従つて若い篤志家が又進んで其任に當らうといふ。自分の下宿の婆さんの子も十六になる、今迄或会社へ使はれてゐたのが急に会社を退いて義勇軍を志願した。南郊へ麦刈りにやられるとか云つてゐた。女も亦男に離れて戦に困るものは此際皆義勇看護婦を志願して政府で急設した赤十字社臨時看護婦養成所へ通つて繙帯巻を習つてゐる。或新聞などは一人の兵士の廻りに三人の看護婦がかかつてゐるポンチを掲げて看護婦の志願者数義勇軍の志願者数に三倍すと報じている。ふだんから女の数が目立つて多い国で往來を歩いても男よりも女に余計出会すといふ有様だが、戦争になつてから若い者が皆戦場へ戦場へと走るので市中は女と子供と不具者とを残す斗りである。伯林では電車の車掌に女を採用したといふことである。これでは市中で一揆^{モブ}が起つて我々を襲撃したつて負ける心配はないと或人は力んでゐた。

○市中の電車は此程から目に立つほど其数を減じて来た。辻々へは揭示して運転手車掌の軍務に従へるもの多く、為めに車台を現象するの已むなきに至れり。市民はなるべく近距離に電車を利用することを避けて以て其の雑踏を防ぐやうせられたしと書いてある。もと独逸の電車には乗替制度がない

為めと街路が完全してゐて歩行が愉快なのと又一つには独逸人の儉約主義とから平素は電車にのるものが甚だ少ない。日曜は別として平日には満員などの車は一つもない。我々が三つか四つの停車場の所を電車に乗ると乗客も車掌も贅沢など云はん斗りに怪訝な顔して下車する時に見送るのが常である。帰朝して新橋で最先きに不快に感じたことは日本人が余りに電車を利用し過ぎてどの車もどの車も皆満員つゞきであることであつた。兎に角こんな工合の電車が八月に入つてからは皆満員満載でそれが而も十分も待たなければ来ないといふ程の車台の減少であつた。街灯も常の半分は消して儉約を図つてゐるので、市中は夜になると急に寂しさを加へたのであつた。時々予備兵の一隊が通過する之を送り迎へる子供の一群がわあくゝと歎呼する若い強い細い声が薄暗い街灯の喘ぐのに和して窓越しに沈思の吾々の耳朵を襲つて来る。

○八月の四日には英国が突如独逸に開戦を宣したので、市民は急に絶望したやうに屁古垂れて了つた。実に此日街頭を歩いて行き交ふ市民の面色を見ると實際の毒の感じがする程に打ち萎れたものであつた。我々を見かけると悄悄と傍へ寄つて来て英国の不信^{ウツワロイドリ}な仕打は恨めしいがしかしお前の国はまさか此独逸と戦ひはずまい。日英同盟に就てお前はどう思ふかなど、聞いて来る。我々はたゞ自分は外交官でないから何も知らぬといつて逃げを打つ斗りであつたが何しろ此日から日本人が段々持てなくなつて、自然市民から猜疑の眼

で迎へられるやうになつたのは事実である。一方から考へて日本が独逸人から斯く迄恐れられてゐるといふ事は鼻の高い所であるが、武装のない我々は之が何かの導火となつて虐待や暴行を蒙るやうなことはあるまいかと益々恐怖と不安の増して来るのは免れなかつた。伯林では此頃軍事探偵や何ぞの嫌疑で折々二三の日本人が取調べを受けることがあつたさうだ。

○此頃民賢の市中ではワグネル物斗りを權威的に上場するブリントレゲンテン座がその循環興行を開いたので遠く北欧の方からも此世界の芝居を見に来る旅客が入り込んで来る。尤もワグネル物も今年の正月からは版權が切れたので伯林でも此春盛んにパーシファルなどを上場していたが、以前はワグネル物を上演出来る權を持てゐるのはバイロイトと民顯との二ヶ所斗りであつたので、之を見るためには是非夏のセイゾンに南独へ出かけなければならなかつたのである。その因襲で今年も尚盛んに民賢へ人が乗り込んで来た。殊に今年はワグネルの家族が版權上の訴訟をして長くその判決が新聞紙上に賑はしたのであるから一層人氣を煽つたのであらう。元來民賢といふ所は此ワグネル劇を中心として夏期が芝居のセイゾンである。モツアルトの循環興行も此時節に行はれるし又キュンストラータターなども夏の間のみ開場して有名な画工に背景を抽(描)かせ独逸有数の名優を集めて名作のみを上演する。其切符は半年も前から売り出されてゐる。今年は

七月始めからシエクスピアのテムベスト、イプセンのピーアギントなどが呼物になつてゐた。然し之等の芝居は当込んだものである斗りでなく年に短期の興行だから入場料が馬鹿に高い。ワグネル物などは均一の二十五マークも取られるので中々貧乏な留學生などの齒には立たぬが、それでも熱心家は措(惜)まず見物に来る。現に七商(高)の石倉教授は自分と同じ下宿に居られたが、バイロイトのワグネルを見に行くとて五十マークを踏ん張つて切符を予約されたが、丁度開場の頃が戦争となつたので汽車が不通になつて出かけられない。よし出掛けても果して舞台が開くかどうか分らない。とう／＼切符代を棒に振つて思ひ止まられたが、之は後に買戻しをしてくれたので大した損にはならず済んだ。だたら斯ういふ風に此夏場の盛りを当て込んで伯林維也納あたりの一流の俳優も其地の冬のセイゾン^{カガール}を打ち上げるとまづこの南独の大都民賢へ一座を引き連れて客演^{カガール}に来る。伯林ドイツ座のカイスラーもこのカムマースピール座に陣取つてゐたが、折も折この盛りの時期に開戦となつて芝居所の沙汰でない。市中は沸くやうな騒ぎ芝居などを訪ふ人はない。或日本人が此頃芝居へ行つて観客の少ない中へ一人ぼち日本人が呑気さうに見物してゐると何となく気が引けて面白くも何ともなかつたと話してゐられた。八月の五六日頃からぼつ／＼と各芝居が時局に遠慮して閉鎖の広告をする。活動写真館も閉鎖したものがあつた。後に聞けば名優カイスラーも従軍して

小隊長とかをやつてゐるとの噂であつた。

○市中の辻々を飾つてゐる大規模の噴水も皆一斉に水を噴かなくなつた。図書館も美術館も博物館も皆閉ぢた。年に一度大陸新進美術家の作を集める世界的の美術展覧会が今年も例の如く七月から十月迄の予定で市内中央の水晶宮クリスタルパラストで開かれて二千三百点の出品があつた。それも戦時状態になると閉ぢられて了つた。たゞ当地郊外にある動物園のみは子供のために戦争中も引きつゞき開く旨を広告してゐたが、日曜毎に雲霞の如くイサル河の溪谷に沿ふて散策の杖を曳いて繰り出した市民の群も八月へ入つてからはひつそりとして更に娯楽へ向ふ者がなくなつた。

○一日に朝夕二十頁余りを発行してゐた南独唯一の大新聞民賢新報(M.N.N.)も記者の払底職工の不足を理由として一日一回の発行に改め、それも二頁か四頁のままで号外様の戦報斗りのものとなつて了つた。それも余程人手に窮したものと見えて戦報に附ける地図の如きも木版を入れずに活字の罪で組んであつたことも屢々であつた。雑誌もが學術雑誌や美術雑誌は戦争前に刷り上つたものは別として、八月以後には一つとして発刊されないが、僅かに評論雑誌の類が貧弱な姿でキオスクの窓にぶら下つてゐるのみであつた。自分のいた教室の助手某君は今月中旬発行の學術専門雑誌の校正をやつてゐたが五日に印刷所から全原稿を戻して来て当分仕上げの見込が立たぬと云つて来たさうな。八月中旬以後独逸の學

術雑誌の輸入が止まつて泰西世界の近況は何もない凡て休止である、雑誌は来ないのではない発行されないのである。

○僕が独逸人の神経質なのに驚いたことは、愈々民頭落ちと心を定めてから独逸国内の地図を買ひに行つたことがある。所が日頃懇意な書店の店員は氣の毒さうな顔をし乍ら一切の地図類は皆警察から没収されて了つて売ることが出来なくなつたと話した。其後木下理学士が吾々の宿へ訪ねて來られた時にも食堂にかけてあつた歐洲地図を見てどうしてこんなものが買へたか、これをこゝへ掛けておくと警察に見つかると思はれるぞと話したことがあつた。何しろ陸続きは敵国に境を接してゐる此国のことであるから斯く迄に用慎しなればならぬのであらうが、余りに神経質過ぎはせぬか、伯林で或同胞が本屋で地図を一枚買つて來たら後に秘密探偵の嫌疑を受けて拘引され嚴重な家宅搜索を受けたといふ話もある。自分等は幸ひ懇意な本屋の斡旋でベデカーの旅行案内を手に入れてその附図で辛くも用を弁じたのであつた。又此頃辻々にはツエツペリン式とバルセル式の両飛行船の図を比較的に描いて外國の飛行船が來たらば注意せよといふ陸軍からの張紙が貼り出された。人民の中には此図を自分の手帖へ写し取つてゐる愛国家もあつた。こんな些細な処にも独乙式の周密な注意が仄見ゆるではないか。

○追々外國人に対する猜疑の目が鋭くなつて來る。英國の開戦内來は日英同盟の存在を知つてゐる独乙人は決して以前程

日本人に好意を表して呉れない。新聞紙は日英同盟は単に東洋のみに関する約束であるから歐洲の戦争に日本が加はる筈はないとか、日本は独乙に追ふ所甚だ多い、軍事も學術も工事も皆独乙の御蔭で今日の文明をなしたのであるから今に及んで其師たる独乙に弓をひくやうなことは為まいとか、日英同盟は単に政治的のことである、日本人は却て心中に独乙に同盟しやうといふ氣を持てゐるとか色々な評論を掲げて日本と開戦することを非認してゐた。事實独乙人が日本の軍隊を恐れてゐたことは大したものであつて、独乙でも露仏でも日本が味方した方が必ず勝つと考へてゐたらしい。滑稽な話であるが愈々退去といふ時に銀行へ預金の全部を引き出しに数人一度に押しかけた。行員はなぜ悉皆出するのか少し残しておいて取引を継続してはどうかと怪訝な顔をした。その時日本が露國と開戦する為めに吾々も召集されたから帰国するんだと答へたら彼欣然として応諾と答へて外の客を差し置いてさつさと吾々の分を片付けて呉れた。

○停車場附近の混雑は一日一日と増して来る。始めは二三ヶ所口をあけて旅客の出入に便してゐたのが段々混雑を避けるために一方口の外皆閉ちて而も嚴重な兵隊さんが番をしてゐて一々用事を探ねては構内へ入れることにしている。自分も一度弥次半分に切符を買ひに来たと云つて中へ入らうとしたら番兵は今発車時刻ではない、発車間際に買へば可いと云つて銃の台尻で突き戻した。電車の中で日本人同士日本語で面

白さうに語り合つてゐたら車掌が傍へ来て黙つて其二人を引き分けて離して了つたことがあつたといふのも此時分の事。○さしも民賢に根を張つて夜な／＼街路を横行してゐた魔性の者も段々其の数を減じて来た。若い男がゐなくなつて商売が閑になつたので何か転職でもしたのであらうとは吾々の考へであつたが、後に聞けば彼等は若い男が血を見に行つた跡を逐うて戦線に近い方の都へ段々応援のため進軍して行つたのだとやら。

○八月七日には大学構内へは独乙学生にして学生証を有するものの外入ることを禁ずといふ布告が出て一切の外国人は放逐されて了つた。図書館からは貸附の書物は至急返納しろと云つて督促が来る。こいつはいよいよ吾々を遠ざけるつもりだなと一同考へついた。自分の教室の主任教授は日頃嚴肅で聞えた人であつたが、此日自分を其私室に呼びつけて云ふには、警察から達しがあつて公共の建物へは今後一切外国人の出入をさせてはならぬといふことになつた。併しお前は勿論軍事上の關係も何もなし全くの學術研究の目的で来ているのだから自分は只今その旨の証明書を書いてやるから、それを携帯して遠慮なしに教室へ通つて来て差支ない。しかし既に承知の如く研究費は凡て軍費の一部として徴發されて了つた以上今後は万事自弁で研究をやつて貰はねばならぬ、それが厭なら致し方がない書物でも読んでこ、暫く実験的研究を中止して貰はねばならないとの事であつた。自分は他の留学

生諸氏の景況もやはり同然だといふことを知つてゐるから誠に御厚意有り難い。しかし吾々は今日本国から送金の道を絶たれて到底長く茲に研究のため止まることは事情が許さない故一まづ近日伯林の大使の許まで一同で赴いて今後の処置に就いて熟談を遂げて来る筈である。どうかその上婦民して確答するまで一二週間暇を貰ひ度いと答へて一旦辞した。

○翌七日には愈々伯林迄行かうと決心したので又々主任教授クレペリン先生の処へ暇乞に出かけた。教授も少なからず吾々の境遇に同情して呉れたが、さてお別れとなると厳然として教授は云はれた。実に今回の戦争は独逸の学運のために重大な傷手である。助手小使は戦場に行き製造工業は休止して亦研究を続けべき人も器械も薬品もない。斯くして戦争が一年も続いたならば戦後経済が回復して再び有為の土を迎へて学界今日の隆盛を見るに至る迄には少なからぬ月日を要するであらう。お前が再び此教室の人となつて今日迄のアルバイトを又続けて行くことが出来る日が来るのは恐らく十年の後であらうと思ふ。自分はそれ迄生命があるかないか分からぬ、たゞお前が健在であるで此戦争の深手を受けずにお前の使命を全うして行くことを切に望むと云つて、後暫くは悄然として感に堪へぬ様子であつた。此老教授の前を辞する時自分とはたゞ訳もなしに胸が一ぱいになつてレーベンジーウォールの別れの挨拶は声低かつた。

○物価は日々に昂騰して行く。帽子衣類流行品は捨売りにな

つて値が下つて行くのに、食料品は二倍三倍と上つて行く。鶏卵は平素一マークで十三四個のものが此頃は一マークたゞの三四個しか呉れぬ。肉は値が上つたのみならず一人に一回二斤以上は売らぬといふ。在留日本人が舌づゝみをうつ米の飯も一度に一斤しか売らぬといふのもう米は食へまいといふ沙汰になつた。そこへ大半の邦人が懐に金が少ない時と来てゐるから益々心細くなる。各プツラツ〔プツラツ〕へ行つて見ると職を失つた無数の男女が悄然として首うなだれて口ハ台にだるそうな身体を擡せている。そして声もない。公園には塵を掃く人もなく花壇の花にも水をくれる者がない。人はたゞ右往左往に馳せて何のためかこせ／＼と心配してゐる。下宿の婆は税が上つた、お前達が民賢を去ると生活を続けて行くことが出来ないといふしてゐる。日本人許りをお弟子にとつてゐた語学の教師などは明日から糧食を絶たれて食ふことが出来ない。日本人は伯林へ行けば金がなくとも大使が救つて呉れるだらうが語学教師などは土地の者で金を貸して呉れるものもないといつて涙ぐんでゐた。

○伯林の大使館から当地の富田法学士へ宛てて私電が入つた。それによると時局のため金銭上の保護を得んとする者は至急伯林へ来る方便利ならんといふ意味であつた。何を云つても吾々は金がなくては一日も異国の宿に住むことが出来ない。中には手許に今金がないから当分たゞ下宿において呉れ、但し当地引揚の節は必ず一毛も損はかけぬ様に仕払ひは

するから本国から入金があるまで無催促で下宿させろと談じて其下宿に止つてゐる人もある。斯ういふ人達は早速伯林へ出たくても出ることが出来ない。どうしても金が手に入らなければ動けない。名譽領事も金銭上の補助は断るといつたので、外に便る所もない二三の人は日本婆さんの臍繰金を借り出した者もある。

○自分も順天堂医院の大瀧医学士、新潟医専の島田教授、七高の石倉教授などと御相談して、兎に角伯林迄行つて様子を見やうといふことに一決し、三井海軍大軍医を併せて五人の一行は民賢通走組の第一班となつて八月九日の午後九時発の汽車で一とまづ夜逃げをすることに定めた。八日一ぱいは荷造りにつづした。停車場では直通列車がないかは「ら」荷物に預らぬといふし、途中の乗替駅に赤帽があるかあるかないか分らぬからなるべく自分一人で持てる丈の荷物にしろといふ注意があつたので出来るだけ手荷物を軽くした。夏も八月の最中といふに冬服を着て外套を二枚も着込み小道具類はそのポケット押し込んで、なるべく鞆を軽くした。残りの衣類調度書籍書類等は大トランクにギッシリ詰めて之は後日本国へ送つて貰ふ覚悟で皆夫々下宿の婆さんに預けて行くことにした。鞆の中には冬服二着寝衣一着襯衣の着替が二三枚に櫛手拭の身の廻りの化粧道具が一握みある許り。しかし当時はこれんばかりの荷物を手に提げて流れ流れて日本迄も帰つて行かうとは思ひ設けなかつたのであつた。

○七月下旬に英仏旅行の途に上られた民賢党の国手六人鴻三浦北川唐澤丸尾武田の諸君が丁度倫敦を出て巴里へ着いた時に此騒ぎが始まつた。それから六君の消息杳として聞えず、或は今頃巴里の囲みの中に陥つてはゐまいか、或は馬耳塞からでも船に乗つてもう帰朝の途に上つたのではあるまいかと毎日一同其の噂をせぬ日とてなかつた。処が之等の一行が戦ひもいよく深くなつた八月八日の午過ぎに思ひもかけず民賢に立ち戻つて来たのには一同ひた驚きに驚いた。聞けば戦乱の始め巴里の都で遊んで居たが事急と見て八月二日倫敦に逆戻り即夜英国引揚げの独乙人に交つて和蘭を経て独乙に帰り何をおいても自分の財産の整理にと一まづ民賢目がけて帰ることにしたが、ハンノーバーから乗り替へてこ、迄四日四晩混雑の中に立ち通しで食ふものも食はず居睡りも出来ずにたゞ揉まれ／＼運ばれて来たとの話し。いろ／＼途中汽車の連絡の悪いことや各停車場の検閲のやかましいことやなどの話しを聞く毎に元来気の弱い自分は自分達も明夜ここを立つて伯林へ行く間そんな苦勞をせねばならないだらうかと先づ不安に襲はされて来る。しかし多勢を憑みにどうにか成るだらうといろいろ鴻君の御注意を聞き乍ら遁げ落ち旅の支度を急いだ。

○八月九日には友人一知らぬ異郷の長の年月兄弟も啻ならぬ御世話になつた友人に、今夜別れて明日又直ぐに伯林に落ち合ふも知れぬ時局乍ら、一足お先きへ民賢の地を去るお暇乞

に、それぞれいろ／＼愚痴つぽい別れ際の話は中々尽きないものであつた。伯林へついたら其地の景況を直ぐ電報で知らせるやう頼んで呉れよと大使館へ行つたら早く救済の金を送つて呉れるやう頼んで呉れよ誰彼に会つたら宜しく伝へて呉れよといろ／＼な言伝や用向を山ほど任されて午後は氣も心もそは／＼としておちつかない。後事はよろしく鴻君や三浦君にお願いしてもう汽車の出る時刻を待つ斗りとなつた。暫しのひまを電車でイサル河畔の眺めよき辺に遊んでそのハイミツシユな両岸の景に今や色濃き深緑りはさながら故国の山河に似ている趣きを見入り乍ら一九一七年此地で万国連合学会の開ける折にはどうぞ再び此水でもかました甘いビールを飲みに来たいものだとつく／＼別れ惜しき感をしたのであつた。夕餐は特に同宿の方々が手づから用意して下された日本料理の数々に共々日本酒の杯を乾し乍ら再会を期する暇もなく、迎への自動車は来た。同行の人々の遠い近いのを夫々この自動車で荷物と共に拾つて行つて、まだ日は落ち切らぬほの暗い七時半に市民に遠慮して見送る友もない停車場の中に吾々はうすら寂しく立つたのである。

○今乗らうとする汽車は各地の応募兵を集めて行く軍用列車の一つで、その空隙に我々は乗せて貰はうといふのである。二等の切符を買つて揚々と二等車を占領して居ると将校の一隊が乗り込んで来てお前方は外へ行けといふ。相手が軍國の際万能の軍人様だから抗議も出来ない。こそ／＼と三等車に

乗り替へる。しかもこの汽車は伯林の方向へ行くことは行くが軍事列車の都合で何処で乗替へをさせられるか分らぬとの事、それにいゝ汽罐車は国境の重要な区域に配備してあるので国内を走る旅客列車は皆赤錆のある使ひ古しのノロい汽罐車斗りである。伯林まで平時は急行で十時間で行けるものが、今は五十時間もかゝるだらうといふ。それも漸く頼む様にして此汽車へかせて貰つたのだ今更何と小言も云へない。込み合つて乗つてくる人々にも成るべく氣兼ねをせなくてはならぬ。

○扱これからの旅は自分等は果して故障なく安全の地まで運ばれて行くのであらうか。不安の胸のときつく中に午後八時四十分ノロき汽車は汽笛もあげずに静々と夕闇の星をめぐけてプラットフォームを離れて軌り出したのである。プラットフォームには駅員を騙してやうやくこ、迄入つて来たといふ見送りの北川ドクトルが独り寂しく立つて居られた。

(三)

○八月十一日夕。今茲正月自分が伯林を去つて半年余り。自分の南都の生活は急夢に繰り抜けた絵巻物のやうに、美しく、さうして内容のそれは断れ／＼のものであつた。其の春の夜夏の日の物語りをして旧誼を温め傍々伯林にゐる同胞の今日此頃の心持を聞かうと楽しんで友を訪ふのが何よりの嬉しさであつた。まづ此の夕自分の宿の近くに住まる、第四高

等学校の山本教授を訪うた。折柄の雨もよひの空を氣遣ひ乍ら、足早に氏の住むパツサウエル街へかゝる時一天急に灰汁を流して夕立となつた。山本君の部屋へ周章しく駆け込んで久闊の挨拶を交す間もなく、雨は糸となり篠となつた。「大分伯林へ来るのに緩くりとしてゐたぢやないか」と謂はれて自分は少しあてが違ふやうな手持無沙汰な心持がした。実は少々あはて過ぎたと冷やかされる位の覚悟で、民賢を最先き駆けて逃げ出して来た第一着者の安着を祝して呉れる言葉としては之は少しく慳吝に過ぎる。しかし少し話を續けて見ると成程伯林は流石に大都人の心も予想の外に動いてゐるのであつた。民賢で微動と感じた此の戦争は震源地の伯林へ来て見ると案外の激しい恐怖を人々の心の上に与へてゐた。迂闊な自分がせめて大使館の膝下で戦ひの落ち着く迄靜かに読まうと楽しんで、民賢出発の折手提の中へ入れるべき書物をあれこれかかして撰つてゐた時に、伯林に住んでゐる邦人は何の道筋を通つたら最も安全に中立国へ避難できるだらうか何の位の旅費を用意してゐたらずつと帰朝が出来るかとたゞみんな火のついたやうに動亂の巷を早く抜け出る相談のみに明け暮れ忙しかつたのださうな。

○それも邦人中の有志者の発案と大使館員の懸令の奔走とに依つて今日ではどうやら同胞救助の道も大凡見当が定まつたとやら。山本君は「しかし君等もなるべく早く茲を立ち退く支度をしておかなければなるまいぜ」と冒頭してそれから大

使館へ至急來着の旨を届け出で避難立退に要する路用を拝借し、且身許証明其の他の証書類を作成して貰ふやうに早く運んでおかなければならない旨をいろ／＼と注意せられた。

○聞けば民賢から七月下旬に維也納へ行かれました。八月月上旬開催の笹の露都の万国眼科学会へ出席せられる予定であつた新潟医専の菅沼教授は、維也納で八月初め日埃同盟の温い握手の歎に戦争の愉快をしきりと味つてゐられた間に急に天下の形勢は転下して露都の学会もどうやら怪しくなつて来たので、とにかく伯林までもと志し埃独の国境で具さな勞苦と胴喝とを嘗めさせられつゝ、辛くも独都へついたので此の三日前。伯林で聞いて見れば何やら益々形勢が不穩になつて行くので一同帰朝せねばならぬやうな氣はひを見てとり、菅沼君は民賢へおき残した荷物や書類や其の風色やに心牽かれ、一とまづ帰朝の準備迄に重要書類を取つて来ねばならぬといふので、此のどさくさの今日の朝外の人が引き止めるのもきかずに民賢へ向つて伯林を立つたとの事。自分は二三菅沼君への言伝て物を持つて来たのに、行き違ひになつたのは残念乍ら、今日から汽車丈けにでも往復五日は費さねばならぬ南都へ下りの途に就かれたのは、形勢日に／＼変る目今の有様を知る者には少なからぬ憂慮の種であつた。果して君は南下の道々方々の駅でひどい検閲の面倒を見せられたことは、序でを以て前号にも述べておいた如くである。十二日、十三日と一日日民賢から來着する人々を迎へるにつけて、絶ず菅沼君

の安否は噂さの題に上つたのであつた。

○茲に其の菅沼君から聞いた挿話として露都の眼科学会の話しをしよう。之は露西亞魂があらはれてゐて甚だ面白い。始め露都で万国眼科学会開催と決定して、其の出席奨憑の通知書を各国の眼科学者へ配布した時に其の附り書に揮つた一行があつた。それは露国の国憲としての猶太人排斥のおふれで、即ち曰く「本会へ参会する猶太人は開会中は常に會員証を携帯すべく、且總會解散後十日以内に露国国外へ退去せられたし」との厳命であつた。所が独乙医界の耆宿といふと大半の大頭が皆猶太人で、独乙学会から猶太人を除いたら、余す処は少しもないと云はれてゐる位、独乙ではプロフェッソレンに猶太人が多い。此の附り書きを読んで此の大頭連皆が怒つた。そして誰も彼も出席御断りと申し送つたので今度驚いたいたのは露国の学会幹事だ。独乙の大頭が来なくては万国学会の計企も水の泡になるといふので俄かに評定をし直して、更に官憲と交渉の上、その附り書きを取消す旨を再び通知し、低頭して来会を仰ぎ直したが何がさて一旦けちのついた此会の事故景気の盛り返る筈もなく出席予定の人もなく甚だ微々たる会になつて了つたとの話を聞いた。独乙有数否世界有数の学者連を猶太人の一揆仲間同様に心得た露西亞式が面白いと云ふので、学者の経済に風馬車牛なる吾々は甚だ此の話を聞いて悦に入つたものだ。その学会のプログラムに露歴と世界暦と両方が並べ並べ掲げてあつて、而も其の何れが

露歴だとも断つてないので、露歴の方が十三日早いんだとか遅いんだとか論が起つて菅沼君が態々知り合ひの露人の処へたしかめに行かれたこともある。とにかく露西亞といふ国はや、こしい国だ。

○話しは本筋に戻る。八月十一日夜、大瀧君と共に佐藤清一郎君を訪ねると座に三四の学界見知り越しの友たれかれが居られた。密議の筋を何かと問へば明夜伯林出發の内相談でさつた。此処で始めて承つた話によると遂、五六日前迄は伯林から一とまづ和蘭國へ立退くの何の鉄道線を通つたら直通して行かれるのか、又独蘭の国境には鉄道の連絡があるのか、又外人たる吾々も無事国境を超えることが出来るのか、荷物はどの位の物迄持つて行けるか荷物を運ぶやうな雇人が居るのか如何等の消息が全く誰にも分らなかつた。大使館へ行つて問へば、外の外交重要な事に天手古舞てんてこまいをしてゐる同胞の通走の相談などをかまいひつけては居られぬといふし、直接停車場へ行つて鉄道の方で聞いて見てもよく分らぬといふ斗りでかいくれ実をあかして呉れない。然しいつまでこんな人氣の悪い所に無い金の日一日と減つて行くのを心細く見守り乍ら住んでゐる訳にも行かぬといふので勇心敢為なる京大中西博士の一行四五氏が、一つ先づ冒險的に平生海牙行の急行車の通る道筋を撰んで進んで見やうと思ひ立たれ国境の様は追て電報するといふ約束で伯林を出發されたのが去る七日の夜の事とか。その国境から發せられた電報が昨日日本大

使館へついたのであれば兎に角国境の停車場迄は無事に行かれたことは確からしい。しかし国境を一步でも出ればもう通信の自由がないので、国境通過の景況については全く分らない。先発隊が戻つて来ない所を見ればどうやら国境は越えるのであらう。此の推測に勇氣を得た他の三五氏は更に隊を作つて今夜の汽車で同じ道を進んで見らるるつもりとの事。そこで佐藤君の一連も明夜兎に角伯林を立つて国境ザルツベルゲンまで向つて見やうと一同申し合せたが、扱国境では独乙の汽車と和蘭の汽車とが一つ停車場で落ち合つて連絡して、平素のやうに吾々の足を勞せずに乗替へればそれで事すむものか、又は国境一つ手前の独乙駅でおろされて、国境一つさきの和蘭駅まで荷物を負うて歩いて行かねばならぬものか、それにしても何か荷物を運んでくれる担夫でもゐるのだろうか。国内ですらあのやうな八釜しい検閲をする位だから国境の軍事検査は^{まじ}酷しいものだらう。大使館では日本文でかいた書類は一切持て出てはいけないよし独乙文の學術論文でも疎雑な軍事検査を受けたらどんな難をうけまいものでもないから、なるべく当館に預けておかれた方がよからう。之等の書類を抑留されるだけならばまだしも、其の身まで拘禁されて憂い目を見るやうな事になつてもつまらぬから一同注意をせよといふ話があつた由、そんなこんな理由で此の一行もなるべく荷物を少なくして自分一人でも持てる位のかさにした。衣服は重いものは身につけて軽い薄衣を行李

に入れた。何でも道中食事に困るといけないから弁当を作つて持つて行くつもりだとの事。そんなあはてた話しをきかされ又た目のあたり逃仕度の準備をされるのを見せられると何だか今日伯林へついたり自分の自分等は愚図々々してゐると之等の人々よりも手後れになつて、独り伯林にとりのこされてとう／＼避難が出来なくなつて仕舞つて、之から先き長い憂き目を見るのではないかしらと何だか急にぞく／＼物恐ろしくなつて来た。早速大瀧君を促してどうでせう吾々も明日大使館ですつかり準備して貰つて明後日位に出立の出来るやうに仕度をしやうではありませんかと怖氣を揮つて立相談をする。

○こんな模様で足許から鳥の立つやうな騒ぎに巻き込まれ、伯林へついたらすぐに伯林の景況を電報で知らせると民賢の友達に約束して来たことも忘れて了つて、ひたすら自分等の身の上の事計りに氣をとられて了ひ、疲れたからだを三日振りて柔かい布団の上に横たへた。平素なら前後も知らずに深睡すべき筈の此の夜の眠りさへも決して安穩やかなものではなかつたのである。

○翌朝は早速同行の人と共に大使館を訪づれた。まだ午前九時。早いから大使館員もまだ来てゐないかもしれぬと思ひ乍ら闖を排して入つて見れば之はいかに。まだ早朝なのにもう何十といふ同胞が待合室応接室に屯集して何かざはざはと議論してゐられる様子。此処で又々事態を告げて来た噂を聞

いた。誰それは軍事探偵の嫌疑で今朝拘引された。誰それは地図を買ひに行つて告訴をされて自宅搜索された。又松下旅館や日本倶楽部の附近にはいつも探偵らしい奴が見張りをしてゐるぞなどと恐ろしい噂が伝へられてゐる。大使館からは毎日のやうに地方にある日本人に即時出府しろと電報を打つてゐるのに一向誰もやつて来ない。ストラスブルグからまだ来ない、フライブルグ、ハイデルブルグからもまだ誰も来ないなどと心配してゐる人がある。傍にゐる館員も顔をしかめ乍ら、ミュンヘンからもまだ誰も出て来ないが、案外田舎にゐる奴はのんきだなあと云ふ。茲に於て吾々あはたゞしくのさばり出て民賢よりの先登一は昨日午後到着、此処に同行五人罷り出ましたと云へば、館員も俄に愁眉を開いて、それは何よりおめでたう。何しろ伯林の混雑は御覽の通りの仕末ですから貴下方も至急立退の準備をせらるゝと同時に民賢の残りの人達に即刻伯林へ出て来るやうに電報して下さい。兎に角船越代理大使非常に貴下方のことを心配してゐられるから、直ぐ会つて民賢の様子を話して上げて下さいとの事。

○代理大使に面接して詳らかに南独在留の邦人の景況を伝へ、目下ドクトル試験受験中の者は右すみ次第直ちに上府するであらうが、中には旅費に窮してゐる人も少なくない様子、それを民賢の名譽領事は個人的には一切金銭を借すことは出来ぬといふて少しも相談に乗つて呉れぬ故随分難渋の人もあらうと語ればいやそれを察して昨日五千マルクの救済費

を民頭日本人会の木下幹事へ宛てて送つておいた。之は在留邦人約五十人と見て一人前百マルクづつ伯林へ来る迄の旅費として送つたのだと答へられた。忙しい大使の室を退いて更に吾々は書記官と幾度かの交渉を経た末、一行はめい／＼五百マルクの立退旅費と身元証明書とそれから蘭英米通過の旨旅費へ夫々裏書して貰つたものを受取つて、後から後から押しかけて来る色青白い憔悴した同胞の群と押しつ押されつ入れ代て一まづ旅宿へと引き揚げた。途中電信局へ寄つて民賢の友へ宛て「詳しくは普沼氏より聞いてくれ、ウイールライゼンモルゲンフォルト吾々は明日出發すべし」と電報した。後で聞けば之を受取つた民賢の日本婆さんは「一行が事穩かと思えて、再び明日民賢へ戻つて来るさうな」と云つて、日本の友一同と涙を流して喜んでくれたとやら。さしも後で事情を知つてゐる普沼君に文意を指摘されて、それは英國へでも旅立つのであらうといはれて落膽失望した時の彼等の心持はどうあつたらう。

○大使館でくれる身元証明書はそれ丈けでは効がないといふので一々独乙外務省の証印を貰はねばならない。それは大使館で一同を集めて外務省へ持参し証印をして貰つて再び皆に頒つてくれるといふので、中々其の日の間には合はない。しかも軍人軍属の人々は非戦闘員とは違つて色々の検査の際嫌疑のかゝる点多からうといふので、伯林に在留する軍国有為の猊獅も干城も皆此の身元証書の面では吾々同様平の町人に成り下つて平服で遁走することと相なる。

○聞けば独露開戦の当時伯林の本邦大使館には準備金が僅に二万マルク程しかなかったさうな。此の金で何時迄続くか分らない此の戦争中大使館員は物価の高い伯林に籠城しなければならず、又在留邦人の保護も出来るだけしてやらなければならぬ。本国から着金のことは思ひもよらず、独乙の銀行から融通のことも甚だむづかしい。そこで大使館でも苦辛の

末、兎に角同胞の食扶持までも大使館で出して出す訳には行かぬから、せめて倫敦迄逃げて呉れる倫敦ならば本国との交通もあるし何か救済の方法もあることと信ずるから一と先づ英国へ避難するやうにして呉れ、倫敦迄の旅費にも差支へるやうな人にはその不足額だけは貸与することにするからといふ話であつた。何しろ斯う云ふ急場になつたら、懐にあるが上にも尚多く持つてゐたいのは金である。誰しも万里異郷の旅の身たゞさい懐寒くなれば家郷を思ふ書生共計りだ。どうせ借りるならば使ひ切れずに残して帰つても返す時には同じ事だから、なるべく沢山懐中に持てゐなければ心持が寂しいといふので、大使館員を捉へては切に身の窮状の泣言を訴へて十マルクでも多く借り出したいと試みる。大使館員も流石本場へ乗り出して来てゐる外交官揃の事々々吾々書生連の口先きの及ぶ所でない。十二日の内規では倫敦迄の避難旅費として一人前三百マルクを最高限度として貸すとの事であつた。十三日には少し他より融通の道が開けたとかいふことで相應の金の必要となるべき理由さへあれば尚多額に貸しても

よいといふことになつた所が十四日になると、俄かに国交上の事態が激変したといふことで、金はいくらでも望み次第貸すから成るべく今明日中に独国内を退去するやうにしてくれろといふ性急な話になつた。此の一事を以ても大使館に於てさへ今度の日独間の国交に就ては始めから何等の予想も準備も打合せもなかつたことが分らう。

○そんな例を挙げるといくらもある。吾々と一所に民賢から逃げ上つた一行中の三井海軍大軍医は始め吾々と同じ下宿に居られたが、大使館付海軍武官が十三日の対談の折に、君は軍属だから陛下の命令ある迄は当伯林に滞在し給へ、まだ戦争の将来がどうなるか少しも分らぬこと故、兎に角此処に長く滞留しなければならぬつもりにして早速適当な貸間でも求めて、徐ろに独乙語の教師でも雇つて語学でもとつてゐ給へと勧められたとて、其の日の午後は氣に入つた貸間を探すと云つて伯林の西南の一部をあちこちと貸間札を物色に歩かれたのであつた。翌十四日の朝になつて幸ひ氣に入つた貸間が見つかつたと云つて転宅の報告旁々其の武官の許を再び訪れた時には、武官の様子は昨日と大分變つてゐた。早速同君を引見するなり、至急伯林退去の準備をせよと云つて他に多くを語らず、千マルク余の旅費を呉れて、之で足りなければ又心配するから兎に角退去の仕度をしてくれ給へと云はれたので、今更昨日の御言葉の御蔭で昨日一日部屋を探してこれから早速転宅しやうと思つてその報告に伺つたのといふ呑氣

な怨言も云へずそこ／＼吾々の下宿へ戻つて来られた。吾々は民賢から遙々此処伯林迄、二三の書籍や着替を背負つて逃げて来たものの、此れから先き又こんな辛い思ひをするのも厭だから、幸ひ伯林に滞留せられることとなつた三井君にそんなこんなの不用品を預けて行かうと云い乍ら、吾々の不要の品をすぐつて三井君の不在中に同君の行李の中へどし／＼詰め代へてゐる矢先きに、同君が息せき歸つて来て今の話し。自分も君等と共に今夜出立するから今迄通り之からの旅も苦勞を一所致しませうといふ沙汰に、又しても荷物をあつちへ移しこつちへ返し、それから暫くは又一騒ぎを繰返したのであつた。

○石倉君も独りバムベルク街に新巢を構へて之から戦時の芝居でもゆる／＼見物しやうかなどと云つてゐられた処へ十四日午前の大使館からの急告に、俄に狼狽を始め、では俺も今夜君等と一所に逃げやうと、僅か一兩日泊つた計りで下宿へは違約料に一ヶ月分の宿料を皆払つて立退かねばならぬこととなつた。又他国へ旅行してゐる間に此の戦乱に出会して伯林へ帰りもならず交通も出来ぬ不在の友達、荷物なりともせめて片づけて大使館へ保管を頼んでおいてやらねばなるまい。一方吾々の仲間も自分の荷拵へがあらかた濟むと知己の二三を歴訪してその荷拵らへの手伝ひをするやら、又旅行不在中の友の宿の婆さんを訪れて、主なき書齋の取片付をするやらに、我を忘れ疲れも忘れて共々奔走したのであつた。

○当時の伯林市内の景況に就ては随分記述するに足る面白い独逸魂発揮の逸話にも乏しくはないが、何せよ吾々一行は右の様なあはて方でたゞわく／＼と伯林に二三日を過ぎた計りに過ぎないので十分な視察觀察をするなどいふ風流な暇もなければ頭腦の余裕ゆとりもない。たゞ一通り友を訪づれの道すがら、又夜の散策の足序でに、そちこち曾游の都の辻に昔しの賑はいの思ひ出草に漫步の杖を曳きずつたに過ぎない。しかしそんなあはたゞしい皮想的の眼にも尚、伯林市民の一日一日と増し行く不安の面色と市中の人氣が刻々に寂れる一方にのみ進み行くいはゞ没落の運を語りつゝあるやうなうらがれの都といふ感じは到る処に読むことが出来た。

○地方からの同胞は一日と伯林めがけて上つて来た、皆本国からの送金が絶えたので自己のこれから先きの糧を氣づかつて其の相談に来る者計りで、始めて伯林へ着いてから意外に時局が切迫してゐるのを聞き知つてあはて且驚いてゐる。尤も前にも一寸述べた通り戦争が始まつてから通信機關に非常な厳密な検閲が加へられること、なり、電報なども「事態急なり伯林へ即刻来れ」なんといふやうな過激な露骨な電文は決して局で受付けてくれない、「伯林へ来るがよからう」「伯林へ移居してはいかゞ」「伯林にある某氏が君と直接談じたいことがある」「伯林へ来れば金銭の保護が出来来るかも知れない」といふやうな遠廻しな辞令を用ゐて兎に角伯林へ来いといふ意味を云はねばならぬ。だから之

を呑気な田舎で受取つた同胞に事急といふ底の真意が伝はらう筈がない。皆のそくと一つ金でも借りて来やうか位の気で景氣見にやつて来るのである。戦時の電報の話で思ひ出すのは、伯林で聞いた逸話だから信疑は確とは請合はないが、高田博士の一行が英国から独乙に居る友に英国は明日対独宣戦を布告するらしいといふ意味をしらせやうとしたが、とても露骨にそんなことをかいては到着の見込がない所から「センセンフコク君明日到着すべし」と、宣戦布告を人名の如くに作りなして漸く目的を達したといふ奇談がある。僕自身の経験でも愈々倫敦へ一先づ避難することに決めてから、民賢の師や友へ「都合に依り一時英国に赴く」といふ意を書いた四五の葉書を出したら、皆「戦時に付發送不能」の四角な消印を押捺されて戻されて来た。別に差支へのある文句はない筈だがと一時は不審に打たれたがなる程英国は交戦の敵手なのだといふが、ついで今度は更に「都合に依り一時和蘭国に赴く」と書き直して出したら之は差支へなく受け付けられたと見えて例の印を背負つて戻つては来なかつた。

○さしも人口三百万世界で最もその道路の清潔美麗規律整然たることを賞されてゐる伯林の市街も、今は往來の人も裏通りはをり／＼途絶え勝ちで、平素は混雑のため横切るのさへ中々の骨折と云はれた名うての広場の辻々も今日は寂しく客待ちの自動車が三つ四つおかれてある計り、自動車といへば

平生なら倫敦の町は馬の糞と煤で臭ふし伯林の町はガソリンで臭ふとまで諷はれた位、大路小路に自動車來往繁かつたものの、此の頃は順々に軍事用に徵發されてしまつて漸く数は十分の一位に減つて了つた。一寸辻で「アウト」と呼んだ位では現はれて來ない広場の停車場附近まで歩かなければ自動車へ乗れなくなつた。之に代つて従來伯林市中に影を収めてゐた辻馬車がぼつ／＼何処からか姿を現はして補充に來たが、之さへもさして便利には乗れない。賃金や酒手は無論平素よりは騰つてゐるし、外国人に対しては殊に車掌の人氣も甚だ凄しい。市街電車や地下電車も運転手や車掌が徵發されて不足といふので車台の数がずつと減ぜられそれでも足りずに尚女の車掌迄採用してゐる車もあつた。尻の大きな女丈夫が男車掌の制服を着て制帽の下から太く束ねた髪の毛を喰み出させてゐる姿は寧ろ氣の毒な程滑稽に見られた。日頃は二時間毎に發車する市を廻ぐる高架の汽車鉄道も此頃は十分二十分も待たせるので少しも便利でなくなつた。

○芝居や寄席はセイゾン外れといふこともあるが一つとして花やかな興行をしてゐる者はない。僅かに小さな活動写真小屋が開いてゐるが、之も愛国的とか戦争実記とかいふ色氣のない種許り幼年児女の士氣を切りとそ、り立て、ある。十三日の夜四五の友と之れを名残りの独乙の旅、明日去つて又何時再び來るとも知れぬ此の町人のお別れにと平素客足の繁イトラルバハといふ料理店へ離別のワインを汲みに行つた。

テーブルの寂しさは物寒く感ずる程で、僅か広間の二三室を開いているだけで他の数多くの食堂は灯火さへも滅してゐる。庭の噴水も音がない。奏楽の音も絶えてゐる。

○十四日朝。愈々今宵で独京を去る暇乞を兼ねて昨年当地に在つた折一方ならぬ世話になつた語学教師の姉妹を訪うた。遙々民賢から三日の苦勞をして出て来たものを迎へて、もう少しは欲待して呉れてもよかりさうなものを、姉も妹もたゞ眼を血走らせ唇を顫はせて口惜しさうな顔をして応接間の卓に就いて黙つてゐる。自分は「思ひがけなく不慮の災變で吾々も今宵限り此地を去らねばならぬ。平和克復の上は再び此の地を踏むであらう。どうぞ復見る日迄御機嫌よう」と挨拶して不興気にそこ／＼辞し去らうとすると、妹は始めて自分の手を控へ「自分等は今迄幾多の日本人に語学の手引きをした。加之独乙は日本の學術の師父であり軍事の教官であり又商工業の先覚であつた。所が今日本は不信なる英国と力を協せてその師たり先進たる独乙に弓を引かんとするではないか。不信義不徳義没道徳も甚だしいではないか。お前も早く本国へ歸つて鉄砲を持つて又出直して来るが宜かるう」と悲憤慷慨の涙をたゝえてゐる。「お前達は戦争中何うするつもりか」と問うたら「自分等は日本人の弟子を失へばもう収入も多くはない。それに国歩艱難の折安閑として坐食するにも忍びない。伯林の女は皆兵士だ。凡て予備病院へ行つて繻帯を巻くのだ」と意氣昂然。傍への手匣から繻帯の切れ端を出

して見せた。「お前に巻けるか」と問ふから「生若くてもそれは商売だ。今仮にお前の片眼がつぶれたとしたら」と云ひ乍ら自分は面白半分にくる／＼巻きに単服繻帯を施してやつたら、喜ばしげに「姉さん。負傷兵らしく見えるかえ」と云ひつ、その繻帯を解かうともせずその姿で自分を出口迄見送つた。いら／＼として落ちつかない不安を抱き乍ら少少な愉快を求めつ、一瞬一瞬を紛らせて行くヒステリカルな戦時の独乙女の気分があり／＼と此の一応接の間に見られるではないか。

○その帰るさ、大使館の友へ訣別の辞を述べに立寄ると之はしたり、館員総出。竝居る同胞に向つて「今朝長文の電報が本国から入つて事によると事態が段々むづかしくなつて来さうになつた。此分では今後金銭上の保護のみならず其の外の保護も手廻り兼ねるかも知れぬ。旅費はいくらでも貸すことにするから是非明日中に伯林を立つやうに準備してくれ給へ」と頼んでゐる。吾々は今宵は出発と心に定めてい乍らも、此の性急な言を聞くと更に又あは、て、ず、にはゐられぬ。直ぐに帰途大使館近くのレーアター停車場へ行つて国境サルツベルゲン迄の二等切符を一行の数だけ買ひ込んだ。切符を握つて見ると、もう遁走の権利を得たやうな気がして少しは落ちつく、其処で今夜の西行汽車の発車時刻が午後十一時三十七分といふことをたしかめて急いで宿へ歸つた。歸る道で会うた一人の友は昨日停車場で聞いたら、軍隊の再輸送が

始まるので十四日から一週間又普通旅客はのせないやうになつたといふ話であつたといつて青くなつて悄気てゐた。自分を買つて来た切符を見せて、切符をうる位だから大丈夫今夜出るよと云つて慰めて分れた。尤も此当時は停車場ですら汽車が出るか出ないか予告は出来ぬと云つて其の日〳〵に一日間の発車予定時間を発表するやうな有様になつてゐた。

○午後同胞のあはてた顔を見やうと松下旅館へ行く。戦争以来現金を多く持たぬ人々はこゝで同胞の誼しみて月末計算の約束で食事に行くので、いつも満員の盛況を呈している。それに今日此頃の事態では此処は民党の議事堂になる。大使館から同胞への通告の公認掲示場に宛てられる。遁走の同志を募るのも、地方の友の身の上を聞き糺すのも多くは此処の食堂で行はれる。今日も吾々は一つには遁走の同志を物色するつもりで出かけたのであるが、行つて見れば満堂の人皆今夜立つといふ一致の人氣。之では嘸汽車の中も賑やかだらうと少々心強くなつて一同の人々に再会を期して別れた。午後十一時吾々の一行が自働車を走らせてレーアターの大停車場に到つた時には右も左も待合室や料理店に居るのは知り合ひの同胞斗りであつた。丸で学会のやうだねなど、悦に入つてゐる人もある。他方で呑気に運の星を仰いでゐた同胞も大抵今日の間に合つて今日午前着いて大使館へ行くなり脅されて今夜直ぐ立つのだなど、語つていた人もあつた。伯林へ来る汽車の旅で皆經驗を得たものか、此度は大抵の人が弁当や水

筒を用意していた。いよ〳〵発車となつてプラットフォームにゐる竝んだ邦人は凡そ二百人斗り、乗り込んでみれば全車に日本人の居らぬ室とてはない。尤もその前夜には某華胄の嗣は一等切符で一等車を占めてゐたら発車間に軍人が乗り込んで来て追ひ立てられ空席が外にないので止むなく四等車に立往生のまゝ、出発されたなど見送りの人の取沙汰をきいて吾々平民はそんな厄に逢ふまいとちやんと懐ろに二等の青切符を持つてゐる乍ら始めから遠慮して三等車に占席してゐたのである。中にはどうせ三等にしる乗れないのだからと云つて三等切符を買つて儉約された人も少なからずあつた。吾々が二等切符を買つたのは、往航の印度洋通ひの船路の旅で、湊々の税関検査が三等客の荷物に特に酷しいことを目撃してゐるので、茲の陸の旅でも国境の税関や軍事検査の際に青切符を出せば少しは寛大にしてくれるだらうと考へて、脛に疵持つ身の聊か独乙政府へ賄賂のつもりでふんばつたのだ。同車の同胞百余人、之を見送る人々も明日必ず出発して何れは同じ和蘭の都に落ち合ふ運をお互に知り乍らも「一足お先へ」「どうぞ御無事に」と、さすが辺りに気を兼ねて万歳とは叫ばぬものゝ、とり〳〵に床しい別離の言葉は交された。中には下宿の主婦や語学の友や優しい独乙の婦人も数多く立ち交つて、やがて相敵視する国交の瀬戸際とは行く者も送る者も悟らずに熱い接吻をとりかはす日独親交の幾群もあつたのである。

○待合室に待つてゐた間に樂山堂の前防君に会つた。氏は多数のアルバイトを大使館へむぎ／＼預けて来るに忍びないので、まよ検査があつてもと身廻りの鞆に収めて来た。その代り下宿の主を頼んで国境迄同車して貰つて万一検査でやかましく云はれたら没収されるのも忌々しいから其の独乙人に再び伯林迄持て帰つて貰つて大使館へ預けることにしやうと思ふ。君もアルバイトを持て来たなら万一の時に此の男に頼み給へと云つて呉れる。実は民賢を出る時から之が氣になつてゐたのだ。せめて何もみやげがない代りに書いた物斗りは持つて帰りたいといろ／＼に苦心をして書いた物は手巾の空箱へ入れて衣類の間へ挿み、顕微鏡標本は石鹼の紙箱へつめ込んだ。そして同じ外の紙箱へは正直に石鹼を入れておいて検査があつたらその石鹼入の方だけ見せて誤魔化さうといふ計画を立てた。伯林の大使館へ行つた折外の人達が大使館員から「之は學術上の論文也」といふ証明を作つて貰つてアルバイトに証明して貰つてゐる有様を見て羨ましく思つた。といふのはそれは全文独乙文の業績に対してのみして呉れることであつたが、自分のは不幸日本字が多数に混じつた草稿であつたから、此の証明がして貰へないのである。今前防君の好意を聞いてやうやう安心し、外の人々とアルバイト持ち出しの苦辛談を交して興に入つたのであつた。

○汽車が動き出すと、之からが国境の停車場で安宅の関の幕となる。

(四)

○汽車の中の細々しいことは、前に民賢逃げ延びの折の汽車の旅日記で散々読者を悩ませたから、今度は簡単に端折つておかう。しかし今度の伯林落ちの三等車は日本語の噂々轉々が中々賑やかである。遙々と「人といふ人の中より選まれて」といふ薩摩琵琶の送別の文句ではないが、孰れも一かどの強い鼻つばし、らを持つて欧羅巴三境界まで箔をつけに来た。学界その向々勇者だ。ロハで汽車へ乗つて日比谷へ駆けつける瘦せ小島の選良諸君とは大いに頭脳と眼界が違ふ。論ずることが、世界地図を踏み台にして、政治を医語交り、で語るのだから。凄まじい此の一百の帝國学者軍の間に介在して窮屈氣に坐つてゐる土着の独逸人たちも、近所でひつきりなしにやまと言葉で討論するのが、頭痛にでも障つたか、皆こそ／＼と近距離で降車して了つて、この汽車がハンノーバーへ着いた頃には全車殆んど黄色の一等国民ばかりとなつた。汽車が停車場へ着くと一同プラツトフォームへ降りて出てお互に新しい話し相手を物色し、氣の合つた者同志お互ひに乗つてゐた箱を交換して、又々新車の話題を蒔く。内地の旅なら日本人同士が全車に満ち／＼てゐながら、こんなにうるさく話しをするものではない。外国で思ひがげけず日本人に合ふと両方とも平素無口なもので非常に饒舌になつて世間話しを始めるものであるが、それが一度に百人も寄つたのだから、話しの尽きやう筈はない。民賢から伯林まで居眠りを仕

通した一行の三井君も石倉君も今度は楽々と眠れなかつたさうな。

○日本人が斯んなに沢山一時に独逸の汽車に乗つたのは開關以來始めてあらう。こんな大勢の日本人が寄つてゐる処へ、一人の車掌がお世辞を云ひに来たとて決して一厘の酒手になるものではない。人はたつた一人で困つてゐる時に又は大勢の外国人が環視してゐる時にのみ思ひ切つて多額の酒手を出すの勇氣と衝氣とを有するものである。此の真理を弁へてゐる伶俐なる車掌は決して無駄なお世辞をつかひに我々黄人群の箱の中へやつては来ない。なまじ變な干渉にでも來ると、得てかういふ時には撲られる。

○今迄伯林迄乗り着けた汽車旅で経験したもののか、一同皆夫々一日分の食糧と水筒又は炭酸水一本と、毛布枕の類を用意してゐる。そして見渡す所何れも冬装束だ。之は前にも言つた通り独逸は元來氣候が冷やかな国で、白地の夏服などは年中決して用ゐる時がない。真夏の頃でも地薄の冬服で通せる位のものだから、此の遁竄にも眼先きのこと計り考へて、たゞ値の高い服を一着でも多く持ち出さうといふ考へから、一張羅の冬着を身に着けて鞆の輕減を計つた人が多かつたのである。殊に揮つたのは京都大学の志田教授で、たゞ見る光沢鮮やかなフロックコートに地厚の外套重ねに着なし、頭にはシルクハットの新らしさを送り眩ゆき計りに押し戴いた。誰であつたか口悪が「志田さんは倫敦の饗宴へ招ば

れるのださうな」と羨んでゐた。之も大方右の心理から出た服装であらうが、後に同車の榮を得た一同の同胞は、遂に氏を一行の代表委員に選んだ。海牙の公使館に挨拶の礼に赴いて戴いた時には、流石に「着の身着の儘」の堂々たる委員の風采には、公使も「之は旅中乍ら御物堅いことで」と嘸満足に思はれたことであらう。伯林の停車場を出る時に氏の姿を嗤つた人も茲に至つて大いにその短見を愧ぢたとやら。

○こんな雜然たる旅人共の間に一点の優しい物語りを添へるのは環女史三浦夫人が同車したことである。三浦医学士御夫妻が洋行を思ひ立たれて伯林へ入られたのは此の戦争の始まる前間もない頃であつたが、漸く伯林見物を済ますか済ますぬ中に此の渦巻が起つたので、碌々音楽研究も出來ずに惜しい別れを此の都に告げねばならぬこと、なられた。而して流石に婦人の身の追跡妄想でもあるやうにいつも怖ろしいといひ續けて夫君に身を縋らせて小さくなつてゐられた。格別やさしい言葉をかけて慰めて上げる弥次馬もなかつたのは範頼の伊豆の失策に鑑みたものか。後で倫敦へ着いてからも、新聞が堂々たる教授諸君の來英を書き立てることはしないで、たゞ環女史が無事に避難された事のみを記載したには、同行の鬚連顔色なし。

○曾我廼家五郎が吾々よりも一に早く十三日の夜伯林を立つたといふことは伯林で聞いた。之は芝居に仕組んで自分は国境サルツベルゲン駅のまごつきをお客様に見せてゐるさうだ

が、さぞ舞台の上では安心してまごつけ、遣りよからう。吾々もサルツベルゲンでは大芝居をした。之はもう少し記事を進めてから本筋を紹介するが、海牙の公使館で来着簿に「日本喜劇俳優會我廼家五郎事和田久一」といふ名を見た時には、南洋で鮮料理を食つたやうな味がした。誰やらが「五郎でもこゝ迄来るんだからなあ」と歎ずれば、傍人之を慰藉して曰く「五郎だからこゝ迄来るんだよ」と。

○斯んな下らぬことを書いてみると汽車が進んだり後戻りしたりして一向埒があかないが、夜中伯林郊外のスピンドウを過ぎる。此処には普仏戦争の時の仏蘭西からとつた一億二千万馬克マルクの償金を皆ユリウス塔の中に仕舞つてあるとやら。之は国家危殆の時に動員の費用に使ふべき準備であるといふから、その扉は今開かれて、その流れ出る金は皆その出所たる仏蘭西の為に散ぜられつゝ、あるのであらう。「暗くて分らぬが何やら此処は金貨臭い」と誰やらが云ひ出して一同を笑はせた。

○金貨の話で思ひ出したから、又話しは伯林に戻るが、出発前独貨両替の話しを挿まう。伯林立退の時に一同が頭を痛めたのは独逸の紙幣を金貨に換へる算段であつた。無論独逸金貨は政府や銀行で回収して了ふから市中に於てすら中々手に入らない。然るに大使館で用立て、くれた金は独逸の紙幣である。之では旅中の役に立たない。後で倫敦へ旅行してゐる中に此開戦に出会つた櫻井八校教授の談を聞くのに、当時独

逸紙幣を倫敦の或銀行へ持て行つて英貨に換へて呉れと云つたら、そんな物は火に入れて焼いて了へといつて少しも取り合つて呉れなかつたとやら。この話を聞かぬ前でも独逸の紙幣が交戦国の英国へ行つて相当の値があらうとは思はれない。さりとして之を交戦国たる英国の金貨に換へてくれと云つて行つたとて独逸の銀行が快く換へて呉れるか、疑問である。又よし換へてはくれるにしても一度にこんな多勢の日本人が押しかけて、それだけの金貨の準備があるか知らん、それも疑問だ。十二日には独逸銀行の伯林の本店にはもう換へるべき英貨がなくなつたといふ噂であつた。ライプチ銀行でも断られたといつてゐた人もあつた。自分は十三日に大瀧君が偶然ドレスデン銀行で一磅ポンド二十二馬克の割で換へて貰つて来たといつて英貨を見せて呉れてから、気が気でなく、早速島田教授を誘つて一所にその小銀行へ換へに行つた。受付が「今日は大勢日本人が金をとりかへに来るがどうしたのだ」と不審がるので、民賢の故智を思ひ出して、此処でも「日本が露西亞と戦争するので帰国するのだ」と云つて見たが、向ふもさる者、「なに日本は英国と同盟してゐるから英国へ行つて加勢するのだらう」と云ふ。成程民賢で銀行員をだました時とは時勢が違つてゐたのだ。それでも格別悪い顔もせず島田君のと合せて二千百馬克の紙幣を一磅の金貨百個に換へてくれた。まだ千円千圓の金貨を懐ろへ入れたことの経験のない人達に特に申し上げるが、昔しから千両箱と云ふが、

なるほど百磅の金貨を身に着けて歩くのは、随分保年が折れる仕事である。伯林の掠鳥、盗まれてもつまらないから、チヨツキの裏の隠しへ半分宛振り分けたが、その重みでチヨツキの恰好は悪くなる、肩はだるくなるが、からだは冷える。とう／＼日本へ帰り着く迄此の金貨が荷厄介になつたのである。或人はさる銀行で英貨がないちいふので洪々米国紙幣に代へて貰つた。所が独貨下落の時故独逸の腐れ紙も米国の紙きれ片と代へるのは大層割がよかつた。愈、倫敦へ着いてから、その米貨を英貨に代へたが、此の時は米貨が騰つた時で又々二重の得をした。後生大事に伯林から本国へ英国の金貨を運んで来てやつた労働者は、面の皮さ。

○余談がとかく長くなるが、此の汽車の足もかなりに僕の筆の運びよりも、ろいのである。一日渺茫たる平原の間を走り、鐵道の集合点たるステンダルを過ぎ、アルレル河の灌漑地をのたくつて、日がな一日か、つて午後二時下りにやうやくハンノーバーに着く。幸ひ今度乗り合せた汽車はハンム直行といふのでさうちよく／＼乗り替へることもなく行けるのは何よりも嬉しい。ハンノーバーの大工業市、日本にある独逸語の先生から此処の独逸語が独逸の標準語だといふ話を聞いたことがあるが、駅夫の言葉使ひなどはやはり田舎臭いやうだ。たゞやたらに忙しい停車場といふだけの印象を僕に残した斗りで汽車はまたのそくさど動き出す。車中は中には連日の疲れに居眠る人もあつたが、大体に於て一同の元氣

少しも衰へず。商人でも職工でもかまはず同車の独逸人を捉まへて大和民族の氣焔を挙げてゐる。話は一足とびに運ぶが、かくて夕方間近にレーネといふ小さな停留場で乗り替へをし、直ぐに又西行の他の汽車に座を占めてオスナブリックを過ぎて国境間近いライネ駅に着いたのは夜の十時過ぎであつた。此の次の停車場が切符面に書かれたる独逸最終の駅でそれから先きは汽車があるかないか、まだはつきりしたこととは一同に分つてゐない。今迄乗つて来た汽車はライネを終点にして止まつて了ふ。此の次の駅は五郎の芝居に出るサルツベルゲンで、そこは小さい町で旅舎もないといふ話し。五六の人はライネで独逸国最後の一夜を明して行かうと既にホテルを物色に行つた。しかし大多数の人は、こんなえたいの知れない所に漫然と長居をすることの不安と、又一つにはホテルの宿泊料を儉約しやうとの趣意から、十二時過ぎに出るといふ最終の夜汽車で次の駅まで行つて見やうといふ説に傾いた。僕のやうな若輩は無論さういふ會議に列して大した權威はない。たゞ分別のありさうな人の行動に盲従する計りであるが、前途が全く分らぬといふ此の旅行の成り行きが何としても不安である。分別のある人の説と雖も、實際分別があるのではない。たゞ群衆を煽動するに足る年功と山氣とを有してゐるのに過ぎない。要するに頼む所は多勢の日本人といふ点に在る。しかし此処で群衆に盲従して望が利益を得た一事は、赤帽に汽車乗り降りの荷物を運ばせ乍ら、「誰か払つた

らう」と云ふ臆ろ気な推測から一文も金をやらずに赤帽を追つたことである。

○十六日午前一時サルツベルゲンに着く。小さな駅で赤帽もゐず、物売の店も深夜の事故皆閉ぢてある。火影も暗い大きな待合室に一同自ら荷物を運んでこれからどうなるのかとたゞがやゝ然と騒いでゐる間に、駅員は明朝八時に国境を超えて和蘭のオルデンザールまで行く汽車を出すと一言へたゞけで、皆何処へか眠りに帰つて了つた。此処へ掃き出された八十余の同胞は、とにかく徒歩はせずに和蘭まで行かれることだけは確かめられたもの、その安心に引きつゞいて起つて来るのは次の駅で受けねばならぬ軍事検査の難関である。お互ひに口では己は何にも持てゐないと公言し合つてゐるもの、何かしら一品二品心配気なものを隠してゐるに違ひない。斯く云ふ僕の唯一の不安は日本語で書いた備忘録の一卷だが之は手巾の紙箱へ収めて洋服を畳んだ間へ挿み込んである。前にも述べた通り顕微鏡標本は石鹸の紙箱へ行儀よく納めて別に同様な箱へ本当の石鹸をつめたものを用意して、いよゝの舞台では達磨拔きの手品を一つ御覧に供する手筈をしてゐる。一行の中には既に自分のスーツケースを枕にして板敷のうすら寒い（八月の中旬に）待合室にいざ、たなく眠つてゐる人もある。その傍でしきりに国境検査に備ふべく、行李の入れ替へをやつてゐる人もある。給仕のゐないビュツフェーの卓を囲んでビールもないのに切りと巻舌で弁じてゐ

る人もある。太平なやうな、戦時なやうな変な気分だ。

○そこへ一大警報が迅雷の如くに伝へられた。その警報は今しも和蘭の方からこの停車場へ入つて来た汽車に乗つてゐた一和蘭青年が齎した急飛脚のしらせである。読者、よく聞き給へ、その言に曰くさ、「今夕和蘭では新聞号外が出て、日本は独逸に対して宣戦を布告し、目下日本の陸軍はシベリア鉄道によつて兵を露独の境に増しつゝあり、又日本の海軍はアドリアチック海へ向つて大艦隊を派遣したさうな。諸君日本人は恐らく次の国境ペンタイム駅で凡て独逸軍隊のために捕縛せられ、俘虜とせられて了ふであらう」といふのである。之を聞いて愕然ふる、え上つたのは豈たゞ環女史のみならんやである。

○茲で眠れる人々を揺り起して、待合室内に日本臣民の一大軍事会議が開かれる。而して一同の面前へ件の和蘭青年を引き据えて此の重大なる風説が果して真か偽かを拷問にかける。件の青年は「たゞ今夕和蘭の町でその号外を見たことは事実だが、日本がほんとうに開戦したかどうかはお前達の方がよく知つてゐるだらう。自分はたゞお前達が次の国境駅で迷惑するといけないから好意上に注意してあげた迄だ」といふ。つらく近時の天下の形勢を案じて見るに、日一日と渦亂の輪紋は世界の山河にひろがつて行く。十四日の伯林の日本大使館のあはて方は甚だしいものであつた。その内容は公言して呉れなかつたがどうも日本迄も此の渦紋が波及したもの

らしかった。して見ると此の号外も偽や嘘とも笑ひ去れない。何強ひて笑ひ去らうといふのではないが、兎に角差し迫つて心配なのは国境通過の一件である。独逸の内地で露人が開戦当時にどしどし拘禁せられたことを目撃してゐる吾々には、野蠻で神経質な独逸人が露西亜よりも遙に強いこの日本人民を黙つて国境を通らせる度量はあるまい。噫今は日東学界の勇士も独逸の番犬に均しい国境守備兵のために捉へられて黒麵麴に水をあてがはれて暫壕掘りの工夫に使はれねばならぬ運命に陥つたかと、志士然と喟然嘆息してゐる士族もある。

○そこへ行くとき迄も呑気なのは一方の平民共だ。二十八貫の巨軀堂々たる片山君は流石に考へも大きい。「若し独乙が吾々を拘禁したとしたらばだね、諸君、吾々は抗議しやうではないか。吾々は日本人であるから、日本の飯でなければ食わぬ、刺身か味噌汁でなければ食わぬと云つて抗議しやう」と提議してゐる。一方では「なあに明日国境の停車場へ着いても、一同下車しないで、此の中の工学的技師諸君に機関を代つて運転して貰つて、吾々を海牙迄全速力で運んで貰はうではないか。大体、諸君次の停車場で下車を命ぜられても従つてはならんぞ」と命令を發してゐる人もある。雜然囂然と附景氣に騒いでゐるもの、一同の額には不安の色が漂うてゐるのは免かれなかつた。俘虜になつたら一同切腹するつもりだが、誰か日本刀を持つて来た人はないかなど、

環女史のそばで厭がらせを云つてゐる者もある。

○わやくしてゐる中に東が白む。たゞ見る平野寂寞戦雲の浮片もない太平の停車場だ。駅夫兼駅長が一人と、空の貨車が三輛と吾々をのせて行くべき短かい列車とが構内に転がつてゐる計りである。夜明け匂々此の駅長を捉へて吾々は拘禁されるでせうかと尋ねた人がある。駅長曰く「私は貴下方を拘禁する権限はないです。まあ早く汽車におのりなさい」と。尤も々々。吾々の中に入り交つて和蘭へ行かうといふ毛唐人が六七人、吾々の一行凡そ六七十人の小さい狭い車に乗つて行くことになつた。こゝで始めて二等切符で二等車に乗れたことを感謝する。交つてゐる毛唐を一同で「吾々を跟けて来た探偵だ」と決めて了つて之を軽遠することにし、又々仲間同志群を作つたが、しかし胸につかへるものがあるので伯林出発の時程の元氣は更にならない。さうかと云つて疲れでも眠つてゐる場合でない。午前八時半発車。

○二十分計りして国境駅ペンタイムに着く。すはこそと思ひ設けた張合もなく停車場の警備は案外に手薄である。駅夫が来て、検査があるから各々自分の荷物を持つて検査場へ来いといふ。一同赤帽の厄介にならぬでもいい、程の荷物しか持つてゐない。各自勝手に手に提げて、税関へ廻る。日本内地にゐる人は、欧州の各国境にある停車場税関の模様は想像に上るまいが、しかし欧州大陸を旅行して歩くものにとつて、平時でも此の国境の税関検査が一番氣掛りになるものだ。特に

煙草のみや国への土産をし、こた、ま持つてゐる人達は此の難関切り抜けにいつも多少の苦心はするものである。殊に今度の普通一遍の課税品の検査とは違つて軍事検査であつて、しかも入国の時の検査ではなくて退国の時の検査である。平時ならば退国の時には何の検査もない筈であるのに、それが特に行ふといふのだから、嘸（まぎ）厳密なものであらう。一行中できつと何か大事を仕出来す人が一人や二人はあるだらうと考へてゐた。所が案ずるよりも生むが易し、この検査官はまだ和蘭の号外を見なかつたものと見えて、思ひ切つて手輕にやつて呉れる僕の手品も使ふ処なし。手巾の紙箱は叩いて見て「手巾か」と云つた切り、開けて見ずに無事通過。一同夫々財物隠蔽に苦辛した甲斐あつて、一人として何咎められた者はなかつた。皆が構内の料理店へ集まつて朝食をとつたり独貨を蘭貨に換へたりしてゐる間に、互に顔見合せては「なあーんだ」といふあてが外れて落膽したやうな嘆声を交はしてゐる。思はぬ儲けをしたのは此の料理やおやぢだ。一同が国境無事通過を祝ふ太平楽の腹鼓みに、終ひには食品一切売切れ申候といふ景氣であつた。たゞ惜むらくは戦時の停車場だけに此処でもビールの飲めないこと。

○此処の検査掛も案外氣のいゝ人計りで「四五日來日本人が引き続いて沢山引き上げるが、一体どういふ訳か」と尋ねる。かま、をかけるのではないかと思はれて、此の返事をするには少なからず、くすくす、つたかつたとやら。「日本は

本国が遠いので送金の道がなく、独乙に厄介をかけるのはお氣の毒だから、大使の計らひで一時中立国まで金借りに行くのだ」と、正直なやうな、不正直なやうなことを答へる。その傍から外の人が「駅長此の汽車で連絡して行けば今日中に倫敦へ行けますか」と問ふと、そこは流石に独乙人。「いえ、英國へは連絡の船がありません」と敵愾心を以て挑ね返す。之をそのまま、料理店にゐる御一同へ伝へて又心配させてゐるもの好き者もあつた。

○検査に暇を食ふこと凡そ一時間計りで、再び同じ汽車に乗つて西へ走る。此の次の停車場はオルデンザールと云つて和蘭の第一駅だ。この汽車の窓から眺めてみると国境の警備が何か々見えるであらう。少なくとも、「外国人此の道より独逸領に入るべからず」位の建て札があるだらうと、誰しも同じ子供らしい考へから我勝ちに窓から首を出して平原を右に左に見廻したが流石に太平無事で世界になりひゞいた和蘭国だ。広々とした野原に牛が沢山放し飼にしてある斗りで、之を牧ふ牧人の姿もない。とある小川を汽車が渡る時、この河辺に沿つた小徑に兵隊らしいものが二三人屯してゐた。和蘭兵か独乙兵かと大分議論を沸かせたが後で聞けば和蘭の国境守備ださうな。今丁度和蘭女王も白耳義の轍を踏まぬやうに、独乙兵の侵略に備へるため動員令を下して国境に兵を集めてゐる最中だといふ。和蘭といふ国の人は南洋の殖民地から仕送りを受けて、国の中では風車で麦をひき牛を野飼ひに

して牛乳をとり、毎日パンとミルクとを食つて呑気に暮してゐる逸民斗りかと思ひの外兵隊がゐると聞いて意外に感じた。なるほど和蘭領内に入つてからは、鉄道沿線にも夫の独乙の鉄道警備者よりも服装の調つた立派な兵士が立つてゐた。もう平野のそちこちに悠々と絵で見たやうな風車が廻つてゐるのを見かけるのは、此辺に既に和蘭の風が吹いてゐる証拠であらう。之を見ると車中の遁竄の人も急に活気が出た。今や吾々は蛮野なるカイゼルの土地を離れて、優雅寛仁なる和蘭女王の保護の下に入つたからである。

○午前十時過、和蘭の第一駅オルデンザールにつく。極めて簡単な和蘭税関の荷物検査を受けて、茲に始めて酒精を含有する飲料を以て、命拾ひの祝盃を挙ぐるの権利を得た。麦酒禁止令のために独逸領で万歳を祝ふとの出来なかつた与党はまづ一献といふので此のオルデンザールの料理店に盛んなる満をひいたのである。次の汽車が首都海牙へ向けて出るのは午後四時だそうなる。その間の半日にせめて和蘭の第一足跡の印象を得やうかとぞろ／＼酔顔を野風に吹かれに出かける連れがある。これを外に料理店の一隅に寝てゐる人もある。新聞を繰り広げて「蘭学をやるんだ」など、脂下つてゐる人もある昨夕の号外なるものが事実であつたと云つて町の中から喚いて帰つて来る人もある。文句は何とあつたと尋ねて見ると見ると「和蘭語だから一字一字は覚えてゐないが訳させて聞いて見たら意味は昨夜との同じやうだ」といふ。

○此の停車場で聞く所によると和蘭英国間の通ひ船は従来三四線もあり、且一線が一日二回位宛発船してゐたものが、今は戦時で戒厳を受けた、めと又一つには旅客の数も減じた、めに和蘭のフリッシンゲンと英国のフォークストーンとの間の一線のみを残して他は凡て休航となりしかも此の線も一日一回しか発船せぬことになつて了つたとやら。それに和蘭も目下前記の如く動員中で汽車の連絡が悪いからどうしても今夜一晚は海牙へ泊まらねばならぬ。今夜海牙に泊つて明日中にフリッシンゲンまで行つて明後日発航の船に乗るのが一番早い手順だといふことである。なんだか目の前に見えてゐるやうな氣のする英国へ渡るのに足掛三日もかゝるのなごは、中立国らしくもないと考へられてけれど、今更理屈も云へない。とにかくベンタイムでは英国なんかへ渡る船はないと一喝して斥けられたのに反して此処では詳細に連絡の話しや旅費宿泊の都合まで案内してくれたのが、中立国たる所以なのであらう。苦にしてゐた和蘭語も、来て見れば国民の大抵がよく独乙語を領解するので別段手真似身振りにも及ばぬらしい。之も安心である。

○まづ六時間余りのひまを消すべく吾々の一行は他の片山君等の一行と合して凡そ十人、町内見物と出かけた。田舎町らしい小径乍ら両側の人たちがぞろ／＼と出て来て歓迎やら見物やらに囃し立て、呉れるのが何となく嬉しい。年寄た婆さんは耄碌頭巾のやうなものを被つて周回凡そ三米突もあらう

かと思はれる大きな尻をめぐら、縞のロツクで隠して、ヒコ（と）と歩いて来る有様は長崎開港当時の和蘭の女の絵を見るやうで、和蘭の気分が十分に出てゐた。ヤパンヤパンといつて寄つて来る娘子供をつかまへて蘭語を習つてゐる山本語学教授の熱心さ。之が我日東国の臣民に始めてハイカラを教へた国民かと考へると、今では少々滑稽に思はれる。而し吾々医者にとつては此の国が開発の先進国だ。あだおそろかに見過しては玄白先生良沢先生の御辛苦に対してもすまぬ訳である。

○誰やらの言葉に「日本で一番偉い人は和蘭語を始めて習ひ出したる人と、海鼠を生で最初に食ひ創めた人だらう」といふことがあつた。吾々は後の世の聖代に生れたお蔭でその偉い人の余沢を受けて安々と外国語を習ひ覚える御恩は空しくならず、今未知未見の和蘭国へ踏み入つて今迄見たこともなく聞いたこともない和蘭語なるものを拝見して、どうにかかうにかその意味が師なくして悟り得らるゝのが妙である。和蘭語なるものは独語と英語とを折衷したやうなものだ。道端の揭示札を見て歩き乍ら、こゝは何々といふ通りだな、これを右へ曲がると植物園がある。こゝが入口だな。六歳以下の子供は入ることを禁ず。樹木草花折りとするべからず。此の道行き止り出口はあちらなど、皆よく分る。お蔭で一行人と口も利かずに広大な自然的植物園を叱られもせず無断観覧することが出来た。吾々はかく生まれ乍らにして始めて見た和蘭

語を解するのに昔しの人は不便な学問をしたものだと一同天狗になる。

○貯水塔や寺院などの小高い建設物の頂点には方々に和蘭国旗が軟風に吹かれて蒼空に翩翻と翻へつてゐる。今日は和蘭の祭日なのか知らんと思ひ乍ら或小娘にその旨を訊ねて「何の祭日か」と聞いて見ると、その答は以ての外「あの旗は祭日の印しではありません。此頃独逸の飛行機がとんで来てやたらに爆裂弾を投げるから、もし白耳義と間違へて破壊されては困るからそれで和蘭の領地だといふことを示すために建て、おくのです。つまり独逸の爆弾除けの旗です」とさ。之は尤もである。

○僅かの小町の事故見物も何の手筈マツへもない。平野漠々たる中に遙かに牛の群を見る位で、たゞのんびりしてゐるといふ外に之といふ印象を与へるものもない。和蘭には美人が多いといふ噂を独逸にゐる間に聞いたことがあるが、人口が少ないので美人にも不美人にもあまり多く出会はなかつた。

○その中にライネへ泊る一連や十五日朝及び十五日午後には伯林を出発された後続隊がどや／＼とこの駅に到着される。なあんだ、まだ君方はこんな所で愚図つてゐるのかと後続連は大気焔だ。先発の吾々少々つまらない感じがせざるを得ない。此処で結局一所になると知つてゐれば何も周章で、出なくともよかつたもの、まあ早く出たお蔭で早く和蘭へ入つたゞけのことだ。再び一同元氣をとり返して新着者歓迎のた

め杯を新たにする。どうだザルツベルゲンで日独開戦の噂でおどされやしなかつたかと尋ねれば、案の定後連も何処からかその話が伝へられて、同じ停車場で大評定を開いたとの事。しかし無事にこゝまで来られたので狐につま、れたやうな気持だといふ。なにはあれは嘘ではない。号外の出たことだけは本当だ。しかし号外の記事其物は本当だか嘘だかまだ分らないと、此処では笑ひ話となる。誰か、「開戦のことも本当であればよい」と和蘭へ入つたので急に強がりをついふ。○和蘭は暑中海岸までの遊覧客を招致するために汽車が割引の均一になつてゐるとの事。お蔭で思ひがけなく海牙迄急行車で六時間もかゝる所を二等で三グルデン即ち凡そ三円足らずの安い運賃で行けるとの事である。午後四時過ぎ発車、今度は平時の汽車に乗ると少しも変りなく、中立の平野の風温かき中を気も心ものび／＼と運ばれて行く。日がくれて風車も牛の群も、もう平野の草の色と見分けがつかなくなる頃になるとそろ／＼こつくり居眠りを始める人もある。一行中の武藤長崎商業教授の肝入で予め海牙の日本公使館へ宛て、今夜十一時同胞百人到着するから、前以て旅館の斡旋を頼むといふ電報を發してあるから、何もかも安心だ。停車場毎に召集の兵士が沢山汽車を待つてゐる。それを見送る人民亦堵の如し。車中の日東軍、亦訳もなく彼等を見ては万歳々々を叫んで景氣を沿へる。和氣霽々だ、但しこの和は日の本の和と和蘭の和と両方へかゝつた秀句である。

○十六日夜十時三十分。和蘭の首府海牙市へ着く。公使館から向けられたといふ旅館の番頭共日本人は此方へ／＼と叫んでゐる。志田代表委員の斡旋で全員具合よく四個の旅舎へ分配せられた。吾々の一行中大瀧君を除いた外の五人はホテル、ベレビユーといふ有り触れた名の旅館へ割られて、専用の馬車に揺られて小暗い大路を走つて行く。都の様は夜目乍ら流石大きい町とだけは察せられる。旅宿へ行つて待つてゐると、やがて一行の特派員大瀧君は公使館からの特報を齎して後れ馳せに着せられる。承る所によるに、日独開戦とはうそ也。たゞ或外交上の交渉が始まつた斗り也。英国へ渡るはフリッティング午前十一時発の船が毎日一回あるのみ也。和蘭に滞在するは差支なし。日本へ帰るには和蘭より直接和蘭船によるも可なれど、一先づ英国に行く方便宜ならん。印度洋航路は支障なく継続せられつゝあり。西比利亞線は不明也。和蘭の我公使館には貸して上げる程の金無し。少し位ならば御相談すべし。先づ今夜はゆる／＼お休みなさい。報告終りと。

○之を以て一同安心し、六人が三つの室に別れて各一組づゝ、ダブルベットに相擁して温かい／＼夢を結ぶ。宜なり、この市には世界を護る万国の平和宮があるのである。

中立から同盟国へ

○戦乱の国から平和の都へ逃れて来た吾々は、虎口から慈母

の懐へ返された安堵を得た。此の花やかな曇りもない心で見た海牙の町の印象は今でもあり／＼と輝きのある色合で幻覺に泛べ得るほど吾々の脳裡には深く彫まれたのであつた。安らかな夢が自づから覚めたのは翌朝の九時過ぎであつた。身支度をして食堂へ出ると多忙の逃げ落ちでまだ顔さへ見知らなかつた二三の同胞が、既に此処で朝食をとつてゐられた。窓外を眺めると、此のホテルの向ひ側は広い芝生で、その上では一体の兵士が訓練をしてゐる。訓練といふ言葉は何だか現在の軍隊にはそくはぬやうに聞えるけれど、今吾々の見た和蘭の軍隊にはいかにも恰好の言葉である。彼等が紅緑とり交ぜたやうな美しい服装をして、ドンガラガン／＼と小太鼓を叩く一隊を先頭に立て、歩調正しく行進して行く有様は、どうしても訓練といふ方が相応しい。日本に始めて政治と文学とを教へた支那は今如何。日本に始めて新しい医学と新しい軍陣とを教へた和蘭は如何。それを思ふと日本人が外国で嫌はれるのも無理はないが、この和蘭のどこまでものんびりして物にこだはらないやうな気分を眼のあたりに見ると、此の市に世界の平和宮が建てられてあるのも亦無理ならぬことのやうに思はれる。

○一同で平和宮参観に出かける。和蘭語では之を *Vredenspalis* といふ。無言でこは／＼不案内の電車にのり、此の一語を発した斗りで他は黙々、それでも事足りて巍然たる平和宮の前で一同無事に車から降される。公使館員の話では一昨日時局

を諷するつもりか此の門前へ貸家札を建てた、いたづら者があつたとやら。その跡であらう、今吾々がぐ／＼らうといふ小門のそばに穴を埋めたらしく地面に小さい新しい土盛があつた。吾々が独逸を逃げて今平和宮へ貸家を見に行くとは詭へたやうな面白い好諷ではないか。

○宮殿の中は寄木細工のやうにいろ／＼のもので組み合はさつて出来てゐる。あちらの国の寄附で天井を張り、こちらの国の寄附の絨緞を敷き、大国は大きなものを寄贈し小国は小さなものを献納してゐる。建物はかなり广大、各室もかなり設備は整つてゐるが一体に華美な点は少しもない。吾々に殊に印象を深く残したのは各国元首の御写真を飾つた室で我が先帝陛下の御勇姿が、恰も壁の中央に一段高く掲げられ、殊に本邦特産の漆地金蒔絵の額椽に納められてゐて、一きは他国の元首よりも目立つて拝まれたことであつた。しかし之を以て日本国が特に敬意を表されてゐると考へるのは自惚である。何故かく中央に一段高く掲げられたをつら／＼探つて見ると、丁度一定の順序で額を并べて行つた所、日本の順番に当る場所が、室の中央正面の煖爐の上へ当つたので、それで已むなく煖爐を避けて一段高く壁間に安置された訳である。しかし偶然とは云へ我が日の本が此の各国頭首の室の内で一段偉い位置におかれてあるといふことには、吾々決して悪い気持はしない。案内人は殊更吾々一行の方を向いて、独逸語で「中央の皇帝は日露戦争で世界に名を轟かせた偉大なる日

本国の現皇帝陛下であります」と声高に註釈する。噫明治天皇は欧土には永久に永久に生けるまゝ、でゐられるのである。

○二階中央の大会議室は此建物中の最上位の室である。その広大な室の四壁は実に我が皇室より御寄贈に相成つたる山水花鳥の錦爛の刺繍で全部張りつめられてある。細緻で規矩に捕はれざる曲線を以て描きなされた妙筆の跡を、いかにも緻密に絢爛な色々の絹の細糸で縦横に縫うてある。四角四面な西洋間の壁画としてはいかにもうつらない。しかし外人共を驚かすには十二分に足りてゐる。吾々も此世界の平和宮に於て大いなる満足を得たのである。此室の正面入口の内側に人身大の大きな陶製の花瓶が一對おかれてある。周囲の壁と相映じていかにも東洋の気分で此の列国大会議室を濠はせてゐるやうに思はれる。此日本の風致を助けてゐる巨大なる花瓶は亡びたる清帝室の御寄贈にかゝるものである。

○此処を出て和蘭料理を味ひ、それから有名なモリッツハウスの珍画博物館を訪うて、レムブランドの解剖の名画を見た。美術品などには一向の素養もない身乍らも浮世の商売が医者だから、かういふ名画は日本に居た時から頭にその像が残つてゐたのであつたが、今その実物の色沢を眺めて一層その像の記憶を深くした。近頃英国で見た広告に此の名画をそっくり模写してその屍体の代りにその位置へ大きな瓶を横たへて、解剖教授をして化粧品の広告講義をなさしめてゐる図案を見たが、之は名画を侮辱したものであらう。画題が医者

に關係のあるものだけに、少く茲に抗議を申し立て、おきたいと思ふ。

○町の中を一巡しあちらこちらで和蘭式カフェーをひやかして一まづホテルに帰り、番頭を案内に立て、四時停車場へ行く。フリッシンゲンといふ船着きの町迄の切符を買つて貰ひ、同胞の同勢四五十人と共に、平和の汽車の中で太平洋を竝べ乍ら此の市を見棄てた。終りに一寸申し上げるが海牙を日本の人はヘーグとかハーグとか云ふが、土地の発音に従ふと定冠詞を冠らせてデン、アーツハと呼ぶ。

○途中ロッテルダムで乗り換へて、夜十一時フリッシンゲンに着く。こゝにはゼーランドといふホテル一つあるきりで、到着避難客全部は収まらない。中には渡船へかけあつてその船室へ寝に行つた人もある。吾々一行は六人で二人定員の室へ入り込み一人はソーフアへ吾人はダブルベットの上へ、河岸の鮪のやうに積み合はさつて寝た。翌朝食堂で六人各々満腹の食事をしたが、引き払う時の勘定書を見た「第八号室定員二人室代三グルデン、食事朝飯二人分二グルデン四十七セント」とつけられてゐる。云ふがまゝ、に支払つて六人どやゝと船へ上る。

○十一時出帆。二千噸斗りの小舟であるが今日は定員より倍以上の客を載せてゐるさうな。皆甲板へ出て戦争の煙でも見やうと轟めく。こゝで又新たな独逸で見知り越しの友人に邂逅する。船中格別の事もなし、ただ船から見る両側には此

の海峡を防備らしい大小の駆逐艦らしい英国船が黒煙を吐きつゝ、何艘となく馳騁してゐるのが心強い。英国の海岸に近づくと、空間に飛びかふ飛行機の姿がいくつとなく見える。午後四時フォークストーンに上陸する。税関検査はほんの名斗りで、あく迄も大国民の英国である。況して吾々は一見顔色を見れば誰にも知れる同盟国民である。旅券の検閲も何もなく、荷揚場から早く〜と汽車の中へ逐ひ入れられた。此の汽車は船客専用の汽車で、船客が凡て乗り移ると直ちに発車し、途中一度も道草をくはずに、食堂車で夕食をとつてゐる間に早くも宵の燈火のけぼ〜しい倫敦市へ入つたのであつた。ヴィクトリア停車場で同胞先着の誰彼れに出迎へられて、事もなく附近グルースター街の旅館をあてがはれ、此処に、腐れ縁の落人六人又も相繋がつて入る。独逸落ちの浪人もこゝで始めてゼントルメンの仲間入りしてその翌日は礼装凛々しく帝国大使館へ英国へ入国の旨届けに参上致したのであつた。

附言。筆者やたらに筆を廻はして独逸逃げ落ちの旅日記を長たらしし、此の分で日本まで辿りつくまで書くのには今年一ぱいの本誌の埋め草になるほどの紙数がある。編輯子は元來記事の少ない今日此頃の本誌のために、何でもやたらに長く〜と煽てられるので、そのつもりで閑話を書き立て、来たが、三月始め又々米國留学の命に接し俄かに三月下旬出發といふことになつたので、行李多忙さう悠然

と筆を舐つてゐるわけにも行かず、一先づ海牙から先きを駈け足ではしよつて倫敦の旅館へかけ込んでゐて暇を見てゆる〜此処から再び蒔き直して出かけることにした。近日桑港へ着いたら、更めて博覧会の御評判でも申し上げることにして、此の罪を償ふと思ふ。

⑤ 杉田直樹「敵国から―独逸避難前後の手記より」(『東京日日新聞』一九一四年十月二十七日〜十一月七日)

(一)

◎「カイゼルは何故早く宣戦しないんだらう」。自分はある日、ミュンヘン大学の助教授某君に向つてかう問ひかけた。世界擾乱、七強混戦の大騒動が持ち上つて自分も其の渦巻の中に喘ぐやうにならうとは露程も思つて居ない、頗る暢気なものであつた。六月廿八日奥皇儲暗殺の号外が辻々に貼出されてから(独逸では号外を売つてあるかぬ)官吏も人民も新聞も血眼になつて復讐!!復讐!!と罵つた。

◎自分は其の折ババリアの首府ミュンヘンに居た。ババリア王ルードイヒ三世と暗殺された奥皇儲フェルヂナンド殿下とは叔甥の血を引居られる間柄なのでババリア人の激昂はプロシヤを凌ぐ程であつた。「我老王の爲めに奥獨両国の名譽の爲めに、復讐の戟を執れ」熱病に犯されたやうにかく怒号するものもあつた。

◎外交上の雲行は日に日に險悪になり勝つた奥國が過大な要

求をしたと云ふ、塞国の後には露国が控へて居ると云ふ、蜚語流言紛々たる中でカイゼルの態度は甚だ煮え切らない。何度も宣戦しさうに見えるかと思ふも著しく落着いても居るやうだ。見物に取つては甚だ物足りない。自分はこの物足りなさを口に出して同僚に訊いて見たのである。「それは注意深いからだ」と某君は言下に答へた。「いや臆病風に襲はれてるんだらう」と自分は何の気なしに嘲笑する。「なに、臆病ッ、君臆病な証拠は何処にある?」。某君の顔にはもう青筋が動いて目は昂奮の色に光つて居る。自分は「しまつた」と思つた。

◎元來此のババリアに於てはプロシヤ王ウヰルヘルム二世は殆ど存在を認められて居らぬ。カイゼルは金で雇はれて居る忠実なる役人に過ぎない。平素なら自分の問ひは失礼でも何でもない筈なんだ。併し今や此の年少学者の血管にも、もう不穩な脈が搏つて居る。

◎殆ど戦争の始まるまで一般人民は唯唯露塞を敵と目指して居るだけで、英仏の方は何とも思つて居なかつた。七月三十日に仏国の飛行機がニュルンブルグと云ふ町の上へ飛んで来て爆弾を投じ家屋に損害を与へたと云ふ号外が出た。之れに對しても独人は案外平気でレギールング紙などは「仏国は独逸に宣戦する理由がない。之れは私人たる一仏国士官が我私人の家屋を破壊したと云ふ國際私法上の問題を惹起するに過ぎない」と論じて居る。

◎同様な調子が卅一日の午後まで続いた。然るに一夜を越えた八月一日の朝には天地が覆へつたやうに變つてゐた。あらゆる日常の行為に關する緻密な布告が一夜の中に市内の隅から隅まで知れ渡るやうに準備された。「宮城、兵營其の他公共の建設物及び鐵道沿線には故なく近寄るべからず。若し止むを得ざる場合には衛兵に對して明白に理由を申出づべし。然らざれば或は射殺せらるゝことあるべし」と云ふのも其中にあつた。さうして自動車の運転手などが不注意の爲めに射殺されたとの噂が此れから毎日二三度づゝ伝はつた。

◎七月一日から十月末までの積りで開催せられて居た大規模の瓦斯展覽会も一夜の中に軍馬の收容所と變つて居た。もう全獨逸が戰時状態に置かれたのである。これからの形勢は一日と何人の予想をも許さぬ程の激烈な變化をした。恰も一夜一夜偉大なる不思議の力が別々な色を以て全獨の空氣を染替へて行くかの様に思われた。

(二)

◎獨逸の名物は軍人に學者に社會党である。一旦緩急あれば學者も社會党も軍人も早變する。二日に學校へ出たら、僕等の精神病の教室で教授助手二十五人の中三名を残して全部召集令を受けて居た。お隣の教室はあの世界に名高いミュラー教授の内科室であるが数十人の中から二人残されたのみだ。細菌学のエンメリヒ教授も七十以上の老齡を以て戰場に

向ふこと、なつた。

◎我教室の主任クレベリン博士が余に向つて「研究費も既に三分の一に減ぜられたし此様に手も足らぬので思ふやうに行かなくなつた。君等ももう自費でやらねばならぬ。助手として手伝つて貰へるなら望外の幸だ」と語つた。其の夜出征者送別の宴を張つた。みんな勇ましい顔で元氣なことを云つて居る。中にも内科教室の某助手君の如きは愉快でたまらぬと云ふ風で廊下を走つて見たり梯子を二段づゝ跳上つて見せたりして「戦争の準備、戦争の準備」と連呼した。この連中はエンメリヒ教授の軍医として従軍する他は、凡て唯の予備の兵士として出征するのだ。独逸は字義通りの挙国皆兵である。

◎戦争以前全国民が熱狂して居る中に飽く迄も非戦論を主張して居たのは社会党の諸新聞である。別に群集の運動は見かけぬが「労働者の敵」なる掠奪者の攻撃の筆端が正に火を吐くの概があつた。併し大勢は容赦なく進んで行く。戟と火との相搏つ時は遂に来つた。

◎八月一日の朝から社会党の論調はガラリと変つた。曰く「我等は平和の維持に全力を傾尽したり。しかも必至の大勢は我等の努力を見捨て、終局の道に急ぎぬ。戦鬪の予防に失敗したりし我等は今や一日も早く平和の克復せん事を企画せざるべからず」と。かくて社会党の多くは或は予後備として或は義勇兵軍として戦場に向つた。

◎更に注目すべき二種の出征者がある。一つは例のアルサス、ローレン二州の住民である。僕の教室の小使に一人のアルサス人が居たが彼も勿論召集令には漏れなかつた。不平なのか嬉しいのか分らぬ顔をして黙黙と戦場に向つた。しかし彼等の行先は無論ハツキリとは分からぬが、何でも東プロシヤ、普魯西の方面らしい。毎日西の方から来る列車は沢山のア、ロ二州の住民を載せて東に走つたさうである。

◎今一つは淫売婦である。さしも夜のミュンヘンに蔓つて居た美しい魔物が次第に数を減じて行つて。果は隻影をも認めぬ有様となつた。噂に依ると彼等の多くは戦線に近い方に其の巢を替へたさうである。独逸兵の強いのも無理はない。彼等は凡ての意味の看護婦に随従せられつゝある。

◎かくてミュンヘンの街は日一日とガランドウになつて往つた。人の少なくなるのが目に見えるやうである。街行く人は唯出征兵士に会つて「フラー」を絶叫する事の外、何の的もない。其ガランドウになつた街のガランドウになつた教室の中で我がクレベリン教授は研究の手を一日も休めなかつた。

(三)

◎「野蠻露西亞に墮落仏蘭西」独逸人は口ではかう云つて輕蔑しては居るが内心此の両国に対して常に不安を抱いて居る。しかも八月四日には「老人の英吉利」も愈敵方に廻つた。「我々は恐怖してはならぬ。老朽と野蠻と墮落とは、我

独逸帝国の鋭気の前に、何等の威嚇をも値しない」と新聞紙などが口を揃へて激厲げきれいするだけそれだけ一般人民の恐怖が窺はれる。初め日墺同盟の虚報が伝はつて我等日本人が胴上げされたり、握手を求められたり一方ならずモテたものだが、英国の開戦以来、日本人を見る眼にも鋭い光が加はつて来た。何気なく歩いて居る途で見知らぬ男から突然「日本は何方へ付く」など、詰問される折もあつた。

◎戦争の騒ぎで折角の研究も殆ど出来なくなる。国から金は来なくなる。のみならず、鋭い眼で睨み付けられて恐ろしくもなる。同国人の間にソロ／＼逃げ出しの相談が始まつた。けれども動員完了までは一切の乗客を拒絶すると来たので心細さが一通りでない。愈動員の完了が八月の七日（表向きの動員開始は八月一日であるが実は其の四五日以前からやつて居たらしい。）ところで汽車に乗せてやるとはなつたもの、其の条件がまた大変である。

◎実は客車と云ふものが一つもない。ただ義勇兵を運んで行く車の中に一二の席がある場合に、其処に小さくなつて居てもよいと云ふだけだから、都合に依つて席を方々に移されるのは勿論、何処へ下車させられても不平を云わぬ事、パバリア国境のホーフまでは運んで行つてやるが伯林までは保証が出来ぬこと、何時審問されるか分からぬから決して眠つてはならぬ事、と云ふ条件だ。しかし此の際贅沢は云つて居らぬ。何でもかでも乗つて了へると云ふことになつた一行は自分

を入れて五人である。

◎ミュンヘン出発が八月九日の午後九時——その前七日に自分は暇乞ひの為にクレペリン先生を訪れた。日本人で先生の弟子になつたのが自分で初めてなので、これまで随分面倒を見てくれた。何か祝ひの事でもあると、特に自分の為に一本三マルクの日本酒の瓶詰を用意してくれたりした。ガランドウの教室で先生の前に立つた時は何だが不幸を見捨て、逃げる人のやうで気が済まなかつた。しかし日独戦争が始まらうなど、はまだ思ひも懸けぬので「戦争が済むと、またすぐ参ります」など、御世辞を云つたりした。

◎すると先生は憮然として「君ももう愈愈帰るか。君はすぐ来ると云ふが恐らく再び此の教室に見える機会はあるまい。戦争が始まつた許りなのに既に経費が三分の一に減せられた所を見ると、一年も継続するうちには先づ此教室も閉鎖と見ねばならぬ。勝敗に関らず、戦後国力の恢復は十年を要する。さうして學術の復興は国力充実の最後を待たねばならぬ。君よ、十年の歳月は學術の運命を支配するに充分である。独逸の學術ウツキジヤウツトは今日を以て死滅したのだ」と云つて暫らく瞑目して居たが、やがて語を継いで言ふ「學術には国家が無い。其の属領がドシ／＼發達して立派な独立国にならんことを喜び待つて居る。日本の學術の独立はそれは君等の双肩に懸つて居る。君よ、いざさらば、建材なれ」。

(四)

◎汽車の中ではいろいろ苦しみましたが、今思へば笑ひの種だ。ホーフまでは一等の切符を買つたのだが、一三哩も行くうちにもう三等の隅っこに小さくなつて居た。沿線には物売りは一人も居ない。停車場構内には売店があるのだが、それも普通旅客がないので大抵閉鎖して居る。

◎ミュンヘンから伯林迄、平素なら九時間で行けるところを、途中乗換場毎で七遍も下車させられて殆ど五十時間かゝつた。一睡もしてはならぬと云ふ達示だけれど、身体の方が承知しないでトロ／＼とまどろむ。すると何時の間にか「コラ／＼」と呼び覚される。腹はしきりに減る。汽車の中でパンや果物を配つてあるく男に泣くやうにして売つて呉れと頼むと「貴様は義勇兵」かと聞く。「否」と答へると「それでは与れぬ」と云ふので一向相手になつて呉れない。止むを得ず同車中の人の好きそうな義勇兵に金をやつて、やつて少し計りの食物にあり付くと云ふ策を案出した。

◎ある停車場でこんなことがあつた。次の列車に載せてやる迄は五時間も間があると云ふので、それでは一つ街へ出かけて何か食つて来やうと、停車場警護の、剣付鉄砲に頼んで見ると案内よく承知してくれた。脱兎の如き勢ひでゆつくり街で遊んで帰つて来ると、警護の兵隊さんが交替して居る。わけを話しても「いや嘘だらう」と云ふので許してくれない。とう／＼市長や検査掛りまで出張して鞆の隅まで検査さ

れた上やつと放免にはなつたもの、一時はどうなることかと思つた。

◎伯林へ着いたのが十一日午後五時、拳国戦闘に向つた留守の都に、もう夏の日がたそがれかけて居た。伯林で最も目に付いたのは街の如何にも暗いこと、自動車の数の甚だしく少いこと、夫に人が非常に減つて居る事であつた。翌日大使館へ行つて見ると、もう館員総出で、「今迄どうして居た。あとの者はどうなつた。何度も電報を打つたのに何故返事を出さぬ」と畳みかけられた。日独の国交も怪しくなつて来たので、全部ミュンヘンを引き上げて当地に來いと電報を再び打つたけれど、何の沙汰もないので、ひどく心配して居たのだとのことである。しかしミュンヘンの方に電報の來ないところを見ると何か途中で差支があつたに相違ない。自分等は今更の如く時期の切迫に驚いた。

◎伯林にザルコウスキーと云ふ有名な学者が居る。露国の帰化人でもう余程の年である。自分は一日氏を其研究室に訪ねた。誰も手伝ふ者が居ないので、薬のありかを探すのに半日もかゝつてマゴ／＼しながら「此処を墓場にする。何時までも動かぬ」と頑張つて居る。しかしいくら學術に国境がなくとも、自分の生国と在住国とが各、国運を賭しての大戦には胸中多少の感なきを得ない。暗い研究室内の老学者!!!之も正しく現代文明が生める「淋しき人」である。

◎大使館へは、東京からドシ／＼電報が来る。すると大使館

から邦人を呼んで金を貸してやるから早く立退けと命ずる。十四日の朝の如きは余程容易ならぬ入電があつたと見えて、船越代理大使を初め書記官達も真青になつて目が血走つて居る。

◎しかし立退と云はれたとてどの線を通つたら国境外に出られるか薩張分らぬ。大使館でも分らぬ。それに、疑はしいものは一切身に着けるな、研究物でも何でも邦文の入つてるものは一切持参してはならぬ。のみならず、独文でも少し込み入つたものは没収されるだらうから、なるべく大使館に置いて行つた方がいゝ。それから汽車に乗つても邦人が一箇所に集まつて日本語で話してゐるのはよくない。独逸も余程神経過敏になつてゐるから監禁でもされてはつまらぬ。と一々注意して呉れる。大使館でも余程神経過敏になつて居られる。◎在邦人の寄り合も度々あつた。アルバイトに別れるなどは随分辛い、誰しも命が惜しいのでトウ／＼立退くことにきまる。扱てこれから愈国境超えの喜劇(それでも其の時は一生懸命だつた)が始まる。

(五)

◎十四日の午後十一時に愈和蘭に向つて伯林を立つ。実はどの線で行つたら国境外へ出られるかよく分らぬのだけれど、自分達に先き立つて冒険的に出発した京都大学の中西博士の一行が、国境から打つた電報に依ると、どうも旨く行つたら

しいので、自分等も其の線を選んだのである。

◎いくら置いて行けと云はれても、流石に自分の心血を費いだ研究録とそう容易に別れられるものではない。そこでみないろいろな工夫をする。自分はなるべく大きな石罅箱を二つ買ひ求め、一方は石罅の入つた儘にして置き、他の一方は中身を抜いて出来るだけ多くの記録を詰め込んだ。それで猶残つたやつは鞆の一番下へ仕舞ひこんだがこれはもとより没収される覚悟で居た。

◎国境附近のザルツベルゲンに着いたのが翌日の深更である。すぐに所持品一切の嚴重な検査が初まる。しかし幸にそれは無事に済んだが、更に一層心配な事件が持ち上つた。と云ふのは、国境方面から来た一和蘭陀人が、「昨夜和蘭では日独開戦の号外が出た。日本の大軍は露軍の背後に増援すべく、西比利亞鉄道で輸送中とのことである。皆さんも日本人らしいが、此の次の国境は恐らく無事に通過出来まい」と告げた事である。数十人の一□は俄に顔色を替へた。

◎かうなれば腕力だ、どうでも通つて見せると力む者もある。片山君などは「よし!!! 監禁になつたら、吾等日本人は同盟して米以外の食物は尽く拒絶しよう。屹度持て余して放免するに相違ない」と主張する。みんな大真面目なのである。とう／＼「駅長に独逸の方針を聞いて見よう。さうして相談をきめよう」と云ふ事になつた。駅長は「諸君の監禁されると否とは余の関知する所ではない。たゞ特別の命令なき

限り、余は明朝八時に列車を仕立て、諸君を国境方面に送り出すの義務を負うて居る計りだ」と答へた。至極尤もである。駅長に談判などは今考へて見ると大変な周章方あはてである。

◎案ずるより生むが易い。翌朝八時に出發した汽車は国境のペンタイムに於て普通税関の調べを受けた外は易々と通つて午前の十時半頃和蘭国の最初の駅たる、オルデンザールに着いた。和蘭では中立維持の爲めに続々と兵を国境に集中して居る。血迷うた独逸の飛行機にベルギーと兵を国境に集中して居る。血迷うた独逸の飛行機に白耳義と間違へて爆弾投下をやられては困ると云ふので少し高い建物の屋根には国旗が翻々と翻つて居る。茲まで来ると、一同の顔色はもう輝き渡つて来し方を振り返りつ、「独逸やつて来い」などと力む人もあつた。

◎十六日の午後十一時にハーグに着いて翌日平和宮を見物する。昨日貸家の札を貼つた悪戯者があつたとの噂である。平和宮内の一番大きな会議室に、京都高島屋製山水の刺繍の壁かけが、血と火との渦巻く今の世を知らぬげに、いと森閑と懸つて居る。それから人間よりも大きな支那製の花瓶が、これも悠々と控へて居る。自分が今度の避難旅行中最も「静かなうれしさ」に打たれたのは、平和宮内の此の東洋の色彩の前に立つた時である。

(六)

◎ドーヴァー、カレイの海峡は、軍艦と水雷艇とで埋まつて

居る。其中を縫うて、和蘭のブリシツシンゲンから英国のフオルクストーンへ一日一回船が通ふ。吾等避難民は十八日に其の線上の客となつた。船の両側は英国の駆逐艦、水雷艇で殆んど塙かきを作つて居る。巡査の護衛よりは余程堂々として気持がよい。其の夜、大使館員や其他の在留者に迎へられて倫敦に着く。もう日本へ来たやうな気がする。

◎ジョン・ブルは暢気な人間である。独逸に居る時は、空間の凡ゆる部分あちに口があつて、「戦争く」と絶叫してゐるやうに思はれたが、此処まで来て見ると、戦報の揭示場の下に人が集まつて居ると、各スクエアで頗る悠々たる訓練をやつて居るのを見受ける外には太平の光が洋々として流れて居る。唯其後独逸から続々と避難して来る邦人の話しを聞く毎に、自分も急に切迫した気持になる。其避難民も、十七日の伯林出發の人を最後として、愈々交通を遮断せられた。何でも十八日の朝(?)立つた西君が国境で嚴重な調査を受けた爲に伯林の方へ送り返されたと云ふ噂である。

◎さて一度落着いては見たが何時迄かうしては居られぬ。文部省からは英国以外に留学を命ぜられた者は帰つてもよいと云つて来る。大使館からは早く帰れと勧められる。領事の自宅と大使館とへ茶の会へ呼ばれてゐる間に愈歸らうと云ふ事にきまつた。当時倫敦には郵船会社の汽船常陸丸が碇泊して居たが其の一二等船室は尽く売り切つて了つて居た。

◎一寸話が外れるが、此の自国避難民の帰朝に就て、彼の米

国は最も奇抜なる方法を採つて居る。先づ交戦国在留米人にして此の際帰朝を欲するものは、尽く大使館に届け出でさせ、頗る膨大なる名簿を調製する。それから一週間に一遍宛通ふロツテルダム^{ニール}紐育間の汽船を米政府の手で買ひ占めて、件の名簿の人員を姓名の A B C 順で輸送する。^{アルハットアルフベツト}
貴賤上下の区別がない。(A)荒内鎌太郎が(I)伊藤博文、(K)桂太郎より優待される仕組である。

◎今一つのリバープール、紐育線の船室は競売に付せられて居る。其の結果は毎日の新聞に出て居るが、最高額は一万五千円に達した。自分達も常陸丸が売切れて居るし、且つ米国の船の方が却て安心なやうな気もするので一寸色気があつたのだが、一万五千円の声に萎縮して競争参加を断念した。

◎帰るとなると無理に常陸丸に押込で買ふより仕方がないので談判の結果特別三等と云ふものをこしらへて貰つた。寢室は三等の急増のベットで我慢する。其の代り食物は一等並威張ることは一等以上と云ふ約束である。而して此の特別三等の船客実に七十二人軍人あり、法律家あり、医者あり、例のエムデンの幻が夜々吾等の夢を脅かすべく、腕にヨリをかけて待つとも知らず恰も凱旋將軍の如く、意気揚々として倫敦に纏^{とちづな}を解いたのが実に八月の廿九日。

(七)

◎ルイ十四世の榮華と、大奈翁^{ナボレゾウ}の豪快と、巴里城下の盟とを、歴史の頁の表と裏に持つて居る国、赤い葡萄酒の酒の匂ひに酔うて血汐の燃え易い国、其の国の南の港マルセーユは、国の命を的にしての戦ひの今、果してどんな色彩を呈して居るであらうかと、ビスケー湾の静かな浪に浮んだ頃から、我が好奇の胸は躍つた。

◎マルセーユに着いたのは九月の八日、港に浮ぶ船の数も少く、何となく戦ひに寂た色が見ゆる。然るに愈上陸して見ると私の予想はガラリと外れた。新聞の号外売りが、「^{ラランドバンズババ}独軍巴里に入らんとす」と大書した紙をブラ下げて冷然として立つて居る。道行く人も其れを見てか見ないでか平然として通り過ぎる。「巴里とは何処の都」と問ふ人あらば、「山超え野超え川超えて遠い／＼外国の都」と云ひ相な顔をして居る。

◎黒い女や白い女が、嬌態醜態を尽しての裸踊も平素の通りやつてゐる。戦争の絵葉書を買ひ集めやうと思つて方々の店に寄つて見ると、どれも／＼相談したやうに兵隊さんの側に若い女が搦まつた絵ばかりである。ある料理店の給仕に「戦争はどうだ」と聞いて見たら、「巴里が落ちて政治がマルセーユに移るやうになつたら大変景気が付くだらう」と答えた。

◎唯後備か義勇兵かゞゾロ／＼と街を練つて行くのに遇ふ毎

に、矢張此国も戦争して居るのかと思はせる。其兵隊の服装が又頗る奮ふ。軍服を着たものは外套なし、外套を着たものは軍服なし、詰り一人の分を二人に頒^{わか}つて間に合せて居るのらしい。

◎マルセーユで埃国を引き上げて来た佐藤大使の一行六人を迎へる。もう一つも船室がないので、船長、事務長等の部屋を提供して自分達は廊下に寝る事にする。我等特三連（特別三等客の渾名）は此の際大使に敬意を表せんが為めに、年長者たる三人の禿を選んで表敬委員に上げた。此れを特三中の禿三と称し爾後事ある毎に我等七十二人の意思を代表して船長との交渉やら何やらいろ／＼と骨を折られた。京都大学の中村初太郎さん、順天堂の大瀧潤家さん及び他の一人の禿三に対し茲に深厚の謝意を表す。

◎マルセーユを出てからアドリアアツク海の埃艦を避け、マルタ島軍港の傍より亜弗利加沿岸に近く航路を取つて、九月十二日ポートサイドに着く、地中海さへ過ぎればもう大丈夫だと云ふので、此処へ着くと船中大元氣である。ミュンヘンを出た時には一元素寒い土地なのと、沢山の荷を持ってぬから、なるべく金目のものを身に付けると云ふので一一行冬服を着て居たのを、茲で安い夏服を買つて着替へる。印度洋の夏に堪へる為めとの理由の下に、例の禿三が船長に迫つて、西瓜一百個買ひ入れの許可を強制する。十三日出発の予定を荷上げのため一日余計碇泊する事にきめた時の如きは、帰心

矢の如き豪傑連の論議、頗るワイ／＼然たるものがあつた。◎十四日ポートサイド発、四日間は紅海百廿五度の酷熱に苦しみ、印度洋に出たらもうこつちの物、渺茫たる平和の海の上を昼寝でもして過ぎようと、吾も人も待つて居た。然るに英領ペリム島を左舷に見て進んだ頃同島の信号□上^{だせう}「三隻の商船」ベンカル湾に於て独艦の爲めに捕獲せらる。東洋行きの船は一度亞丁^{アドデン}に寄港し同地官憲の指揮を待て」との信号が悪魔襲来の前兆^{オイジン}の如く我等の目と胸とを驚かした。

(八)

◎亞丁着は九月十八日の夜、其一夜を港外仮泊所に明して、官憲の指揮如何にと待つ。翌十九日の朝同官憲は告げて曰く「コロンボまでは全く安全なり。直に当港を出帆し高速度を以て航行すべし」と。そこで我が常陸丸は急に碇を抜いてひたすらに東へと急ぐ。

◎常陸丸には無線電信の設備がない。何処でどんな雲が動いてるか薩張わからぬ。たゞ盲滅法界に進んでいく。全く薄氷を踏む思ひである。普通の航路は危険だと云ふので、遙に北方に避けて通り、廿二三日頃からは船の燈も総て点ぜぬ事にした。全く字義通の盲滅法界である。

◎辛くも印度洋上亦七日の旅を了へて、二十五日の朝コロンボの港口に着く。港内は船で一ぱいなので港口に仮泊する。着いて見ると、コロンボは今やエムデンの噂で人心恟々とし

て居る——昨二十四日の夜十時にエムデンがマドラスを砲撃し須臾にして姿を南方に没した。二十五日の朝錫蘭島南端の牛が数頭銃殺せられて、頭と角と骨とのみが棄て去られてゐるのを発見した。これもエムデン乗組員の仕業らしい。して見るとエムデンは其の夜の中に錫蘭島の南を過ぎて西の方に航路を取つたのではあるまいか——といふ話が一般に伝えられて居た。

◎其の後何にも知らずにピナン「ベナン」方面から入つて来る船は続々とあるけれど、常陸丸の跡から直ぐ亜丁を出た筈の船は一つも姿を見せない。さあ心配だ、流言が紛々として起る。廿七日の朝、漸く一艘の船が西の方から入つて来る。甲板に立つて双眼鏡を翳して見ると其の船のデツキの上には人間がウヂヤ／＼居る。

◎果然、常陸丸に続いて亜丁を發した英船が五隻共ミニニコイ島附近でエムデンにやられたのだ。しかもコロンボ各新聞紙の報に依れば其の遣り方が極めて豪膽である。先づ船の乗組員は尽く軍艦の上に移し、燃料及食料は悉皆自分の随へてる船に積み換へた後、船底のキングストンを抜いてこれを沈没せしめた。さうして其の船員にあ給料を与え、二三鞭酒を御馳走し、第六艘目の船には「汝だけはゆるしてやる。其の代り此等の乗組員をコロンボへ載せて行つてやれ」と命じて見逃したのださうである。其六艘目が即ち二十七日の朝入港して来た其の船である。ウヂヤ／＼して居た人間がコロンボの

官憲に引渡された。

◎して見ると常陸丸は危い処を逃れたものだ。丁度二十四日の夜に擦れ違つた筈だが、燈火を消して居たために運よくも逃れたのだ。危く命拾ひをしたと云ふので、此際特三連大に呑む。此の時東京の本社より祝電があつた。「万難を排して危地を出でたる我常陸丸の成功を祝し、船長以下船員一同の勞を謝す」と。

◎二十九日○国軍艦○○が英姿堂々として東方から入港して来た。常陸丸船客は凡て異国で親に遇つたやうに喜び勇んだ。其の姿を望み見た許りで、もう親船に乗つた氣になつて居る。同艦は○○○○以東○○湮間の海上警備に當つて居るのだから、同港に於ける任務を終へた後には警備区域内を安全に送つてやると云ふ事になつた。特三雀躍、再び大に呑む。

◎併しその喜びも束の間の幻に過ぎなかつた。コロンボの英國官憲は此の際独りに本船のみの出航を許すわけには行かぬと云ふので翌日○○艦は吾等を残して港を出る。浪の上に残り惜げに迷ふ黒い煙を見送る常陸丸の甲板上の人々はみんな泣き出し相な顔をして居る。世は文明の西暦一千九百十四年、しかも文明の機関□として備はるコロンボの港に、我等は正に俊寛僧都の悲哀を繰返したのである。

(九)

◎「敵艦来、敵艦来、」此の聲が船中隅から隅まで響き渡つて、一同狂ふが如く甲板に走せ集まつたのは十月六日の正午少し過ぐる頃であつた。コロンボで散々焦らされて罪のない船長にまで何度も喰つてか、つた末、やつと出港を許されたのが十月の二日、それからベンガル湾の数日を例のおつかなびつくりを送つて、もう新嘉坡も間近くなつたと思つて居た処へ、突如として此の騒ぎが湧いたのである。

◎なるほど後方遙に一隻の軍艦らしいものが黒煙を吐いて追つかけてくる。頻りに望遠鏡で眺めて居た船長が「どうも国籍がわからぬ、少し怪しい」と心配らしく云ふ。「独艦ではあるまいか」「さうかも知れない」こんな要領を得ない話がある。おしまひには「敵艦来、敵艦来」と云ふ頗る要領を得た断案が、誰が下したともなく、既に動かすべからざるものとなつて居た。

◎高速度!!!高速度!!!出来るだけ逃げる事だ。もう独艦ときめてしまつて居るから、停船の信号を受けても、応ずることぢやない。大使の一行は既に重要書類を片付けて何時でも焼き捨てられる用意をする。同船の海軍軍人も此れに倣ふ。特三の豪傑連は凡て真青だ。急にフロックコートに着換へ、あらゆる所持の貴重品を身に就けて捕虜になる用意をするものもある。態と浴衣の儘万一の場合泳がれるだけは泳いで逃れよう

と云ふものもある。兎に角真青ながら覚悟の体だ。唯不思議なのは見る間に大きくなるべき筈の独艦の姿が何時迄も甚だ小さい。

◎やがて二発の空砲が響く。我が常陸丸は一向に速力を緩めぬ。続いて又一発、今度は非常に硝煙が渦巻く、と思ふ間に常陸丸の後方、若干の距離の処にパツと水煙が立挙る。「ヤツ実弾だ!!!」全船員船客も電気打たれたやうに立ちすくんで了つた。

◎「止むを得ません。船客の生命の危険を防ぐために此の上は停船します、」と船長は宣言する。かくて常陸丸は進行を停めて頭上に落来る運命を待つ。敵艦はやがて近付く。眼を定めてよく見ると何の事だ。それは船尾に仏国軍艦旗を翻した一隻の水雷艇であつたのだ。狐につま、れた様な気持である。むかうでも頗る拍子抜がしたと見えて、「何故に停船せざりしか」と詰問の信号を掲げた後、更に「新嘉坡迄は安全なり」と教へて軸を返して走り去つた。

◎七日に新嘉坡に就く。仏国商船が沢山の安南兵を載せて本国指して港を出て行く。彼等はみんな我船に対して白い手巾を振りつ、万歳を連呼する。其の行く先の不穏な海、其の海を超えた先の陸の上には血を好む戦ひの神が、あはれなる彼等の来るを待つて居る。いぢらしい万歳の声を聞くと坐ろに□涙が催される。

◎新嘉坡八日発、十四日香港着、もう何の事件もない。

二十一日未明神戸着の筈を暴風と黒潮に送られて二十日夕、神戸に着く。十八日の晩には船の御馳走で別れの盃を挙げる。書いて見ると一場の喜劇に終るが、それでも生死を共にする積で居た船及び船友との別れには流石に多少の感慨もある。さらば我が常陸丸よ。我が五十日の友よ、永へに健全なれ(了)。

(以上は杉田氏の手記を□俗に訳解したものなり。若し夫れ杉田氏の意を誤り、其の真摯を傷ふあらば単に筆者の罪なり。)(筆者記)

【追記】本稿は、愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究」(GLOCAS)、科学研究費基盤研究(B)「第一次世界大戦中・戦後の日中関係と東アジア国際秩序：対華二十一カ条要求の波紋」(研究課題番号：18H00825、研究代表者：奈良岡聰智、二〇一八年度―二〇二〇年度)による研究成果の一部である。

- (1) 増田義一「瑞西を脱して戦時の巴里に入る」『実業之日本』第十七巻第二十三号、一九一四年。
- (2) 櫻井は一九一三年一月から一九一四年四月までベルリンで留学生生活を送っており、その後ミュンヘンに移動し、同地で研究を行っていた。九月になったら再びベルリンへ戻る予定であったところ大戦勃発に遭遇したとのことである(「三人連欧羅巴落人 独逸逃げ出しの話」櫻井一神戸一日野の三君『名古屋新聞』一九一四年十月二十二日)。
- (3) 明治・大正期におけるミュンヘン大学への日本人留学生については、

森川潤「ドイツ医学の受容過程―ミュンヘン大学留学生を中心として」『教育学研究』第五十二巻第四号、一九八五年、朝治啓三「世紀転換期ミュンヘン大学で医学学位を取得した日本人医学者」『關西大學文學論集』第六十六巻第三号、二〇一六年を参照した。

- (4) *Personalstand der Ludwig-Maximilians-Universität München, Sommer-Halbjahr 1914*, Ludwig-Maximilians-Universität München, S. 193. 医学以外では経済学に二名(寺尾隆一)、哲学(芸術史)一名(澤木四方吉)が登録しており、日本人学生の数は総計二十六名であった。なお非ヨーロッパ圏ではアメリカの二十八名に次ぐ多さであり、ヨーロッパ圏ではロシア(ヨーロッパ部)二百十三名、オーストリアハンガリー百十六名(オーストリア八十三名、ハンガリー三十三名)、スイス七十四名、ブルガリア三十二名、ギリシャ二十七名と続き、日本の留学生数はセルビア二十一名、イギリス十六名よりも多かった(*ibid.*, S. 192)。今回は紙幅の都合上、ごく一部の留学生についてしか触れる事ができなかった。他の留学生に関する詳細は別稿に譲ることとする。

- (5) 鴻は一九一三年の夏学期までは学籍登録をしていたが、それ以後は登録が確認できない。おそらく登録はせずに、学位論文の準備などをしながら研究をおこなっていたと思われる。

- (6) 例えば『朝日新聞』では、エムデンに関して「狂せるエムデン」(九月二十六日)、「エムデン邦船を撃沈す」(十月三十日)、「死物狂いの独艦所在 荒廻る洋上の悪魔」(十月三十日)などの標題を付けた記事が掲載されていた。

- (7) 一九一四年九月に在独アメリカ大使館からの安否確認依頼に対してドイツ外務省宛てにドイツ内務省が作成した資料にはバイエルンで抑留されて日本人として、Aubokun, Missionsdiener, 25 Jahre, Kaiserslautern, Daigano Nagao, Koch, 24 Jahre, Bernack と記載されていた(*Verzeichnis der in Deutschland in Schutzhaft befindlichen japanischen Staatsangehörigen vom 16. Sep. 1914*, in: *Bundesarchiv, R901/ 83620*)。この報告は同アメリカ大使館から最終的に日本外務省へ、Aubokun

- missionary, servant at Kaiserslautern へ Bargano Nogaio, Cook at Bernack (2) 名の抑留者情報として伝えられた (「JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B07090576200」、欧州日独戦争ノ際在外公館及本邦人引揚一件 第一卷 (5-2-10-24_001) (外務省外交史料館)「六〇コマ目」)。この情報をまとめた名簿 (同上、七五コマ) では、アンについては掲載されておらず、長尾については「長尾バルガロ」として記載されている。「JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B07090577300」、欧州日独戦争ノ際在外公館及本邦人引揚一件 第三卷 (5-2-10-24_003) (外務省外交史料館)「九三コマ目」に「中屋代五郎」とあるのは長尾のことを指していると思われる。
- (8) *Rolf-Harald Wippich, Internierung und Abschiebung von Japanern im Deutschen Reich im Jahr 1914, in: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft 19, 55 Heft1, 2007, S. 28.*
- (9) 長尾については以下の資料に依拠した。「長尾代五郎」(「JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B09072960400」、日独欧州戦争関係救恤一件ノ申請書 第三卷 (5-2-17-0-30_10_003) (外務省外交史料館)」、「JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B09072909200」、欧州戦争関係特殊権利審査会関係一件ノ遺留荷物ニ関スル独逸政府回答 (5-2-17-0-29_1_18) (外務省外交史料館)「三三―三三コマ目」。